

---

# バカとガスタとstrikers

ガスタさん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとガスタとstrickers

### 【Nコード】

N1516V

### 【作者名】

ガスタさん

### 【あらすじ】

ガスタの一族の末裔である少年「藤崎一樹」と天才エンジニアの「シルフィ・マテリア」、明久の隣に住んでる南家三姉妹の次女で観察処分者の「南夏奈」、strickersの「スバル・ナカジマ」「ティアナ・ランスター」がFクラスのバカ共と試験召喚戦争とかで頑張っちゃう話です。バカテスとstrickersと遊戯王とみなみけがクロスしてます（設定とかでREBORN！あり）明久が剣の達人だったり、なのはたちとティアナが幼馴染だったりオリジナル要素満載です。

## 設定（前書き）

初投稿です。よろしくお願ひします。

木下姉弟が木下兄弟になっていました。すいませんでした。  
八神 迅 さんありがとうございます

## 設定

各原作との相違点

- 1・特別教科として家庭科・美術・技術がある。これらの教科は総合科目には入らない。
- 2・明久が剣の達人で木下姉弟とは小学校のころからの友達。
- 3・ティアナがイギリス人。
- 4・「時空管理局犯罪取締課第97管理外世界支部（通称ペガソ）」という組織がイギリスに存在する。

ふじさきかずき  
藤崎一樹

イメージは「ガスタの巫女ウィンダ」の髪と目を黒くした感じ。魔力を使うときはまんまウィンダになる。

中性的でよく初対面の人に女と違いられる。

仲間にはやさしいが、敵にはとことん非道になる。

アニメとラノベとマンガとゲームが趣味。

イギリス出身の日本人で、風の一族「ガスタ」の末裔。7歳の時に日本に来た。高1の時にイギリスに留学という名目で機動六課に入隊。そのため学校には入学から1週間くらいしか行っていない。

ペガソの支部長を父に持つ。

ティアナとシルフィ、なのは達とはイギリスからの幼馴染。なのは達とは、父が教官を買って出たため、3人がイギリスに来た時に知りあう。日本に来てから、学校が同じだった関係で明久や秀吉と知り合う。

デバイス名は「フライハイト」待機時は右腕に腕輪としてつけている。

5D・sのひとつである「スターダスト・ドラゴン」の所有者。

日本史・世界史・古典・家庭科が得意で、450点以上取ることが

できる。逆に保体・科学が苦手で、こちらは50点取れたらいいほうである。

デバイス：フライハイト

ドイツ語で自由の意味。基本はウィンダの持っている杖と同じだが、一樹の記憶から、あらゆる武器の形を再現することができる（なのはレイジングハートのような、実際に見たことある武器はもちろんのこと、Fateのセイバーのエクスカリバーなど、2次元でもOK。ただし能力を使うことはできない）

シルフィによつて召喚獣とリンクできるようになり、武装を召喚獣で使うことができるようになった。フライハイトを介して、一樹と召喚獣もリンクしているので、フィードバックがある代わりに、操作性が格段に増した。

レアスキル：次元創世<sup>パラレル・リンク</sup>

世界観のはっきりしている世界をパラレルワールドとして出現させる。ただし、自分が生まれるよりかなり前の世界は不可能（ストライク・ウィッチーズなど。ただし、現在がまたがっていれば可能）時代がわからない・はっきりしない・年度表記が特殊な世界はOK（東方など）。

あくまでパラレルワールドなので、決して交わることはないが、その世界の住人から能力を借りることができる。ざっくりまとめると、2次元の能力を使うことが出来る。

シルフィ・マテリア

イメージはストパンのエイリカ・ハルトマン。

天才メカニックで一樹のデバイスをほとんど一人で作り上げた。どこに行く時もノートパソコンを持ち歩いている。波動使いで嵐・雲・霧の属性が使える。

ボックスを大量に持っている（ほとんど自作）

孤児だったのを一樹の父が引き取り、一樹とは兄弟同然のように過ごしてきた。

一樹が日本に行く時についていった。

コスプレ好きでムッツリーニの撮影会によく付き合う。

得意教科は数学・科学・物理・技術で500点以上を軽くたたきだす。英語は200点くらい。

しかし他の教科が壊滅的にダメで30点もとれない。  
秀吉が好き。

ティアナ・ランスター

強気でプライドの高い性格だが、面倒見のいい一面もあり、一樹や明久の常識はずれな作戦にも付き合ったりする。

イギリス生まれで一樹とシルフィの幼馴染。幼い頃に両親を亡くし、兄ティータと共に藤崎邸<sup>ヘカク</sup>に住んでいた。

二人が日本に行く時、一人イギリスに残った。

その後、六課で一樹となのは達と再会した。

六課解散後、一樹の父に文月学園に誘われ日本に来た。一樹の家に居候している。

得意教科は英語・世界史で、ギリギリ400点レベル。国語・古典・日本史が苦手。

スバル・ナカジマ

前向きで能天気な人当たりのいいムードメーカー。

六課で一樹と出会う。

六課解散後、一樹の父に文月学園に誘われ日本に来た。一樹の家に居候している。

明久と同じくらい勉強ができない。保体のみAクラス並み。

南夏奈

明久の隣の部屋に住んでいる3姉妹の次女。

いつでも明るく活発で、常に自分が「おもしろい」状況を作ること  
を考えてる。原作と違いメンタルが弱い。

美波と名前が被るため、カナと呼ばれている。

明久よりちよつと頭がいくらかのバカ。

観察処分者。

明久が好き。

吉井明久

自他共に認めるバカだが、人のために頑張れる心やさしい性格の持  
主。

一樹やシグナムから剣を習っていた関係で八神家に入入りすること  
が多く、ヴィータに懐かれている。

波動使いで、雨・嵐・雷・大空の属性が使える。

波動をこめることで真剣に変化する木刀「涙鳥」のボックスを持っ  
ている。

家計をカナの姉である春香が握っているため、ちゃんとした生活を  
送っている。

## 設定（後書き）

本編は次から始まります。

9 / 20日

一樹のデバイス名・ペガソの正式名称を変更。デバイス・レアスキルの説明を追加。その他ちよいちよい修正しました。



## 二人のバカの新学期（前書き）

バカテスト

調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。

この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いられるべき金属合金の例を一つ上げなさい

姫路瑞樹、シルフィ・マテリアの答え

問題点… マグネシウムは火にかけると激しく反応する為危険であるという点。

合金の例… ジュラルミン（姫路） ステンレス（マテリア）

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんとマテリアさんは引っかけりませんでしたね。

土屋康太の答え

問題点… ガス代を払っていなかったこと。

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

藤崎一樹の答え

問題点… そもそもステンレス鍋を買えばいい

教師のコメント

マグネシウムを材料にした場合の問題点を答える問題ですので不正解です。

南夏奈の答え

合金の例：ミスリル銀

教師のコメント

現実とゲームをこっちゃんにしないでください。

吉井明久の答え

合金の例：未来合金（ すごく強い ）

教師のコメント

すごく強いと言われても

## 二人のバカの新学期

僕等がこの文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。校舎へと続く道には綺麗な桜が咲き誇っている。

……が、今はそれどころじゃない。

明「急いでカナ！遅刻する！」

夏「わかってるよ！つたく、なんでハルカもチアキも起こしてくれないんだよ！」

そう、僕達は今、脇目も振らず全力で走っている。

朝起きたらこんなメモが朝食と共にテーブルに置いてあった。

『起こしても全く起きないから、わたしとハルカ姉様は先に行くぞ。遅刻しないようにな。夜遅くまでゲームしてるのが悪いんだからな。by千秋』

同じようなメモがカナのところにもあり、

『起こしても全く起きないから、私とチアキは先に行くわよ。遅刻しないようにね。夜遅くまでゲームしているのが悪いんだからね。byハルカ』

と書いてあった。

夏「なんでゲームやってることがばれたんだ？ばれないようにこっ

そりやってたのに」

明「僕なんて部屋違うのにはれてるよ。なんでばれたんだろう?」

一つの疑問が解決しないままいつの間にか校門が見えてきた。

(ちなみに、なぜばれたかという二人とも寝落ちしたため、手にPSPを持ちながら寝てたからである)

「吉井に南、遅刻だぞ」

玄関の前でドスの利いた声に呼び止められる。

明「あ、てつじ　じゃなくて、西村先生。おはようございます」

夏「おーす。鉄人」

鉄「吉井、お前今鉄人って言わなかったか?」

明「ははっ、気のせいですよ」

鉄「ん、そうか?後、南お前は普通に鉄人って言ったな?」

夏「別にいいじゃん。呼び方くらい」

ちなみに、鉄人というのは生徒たちの間での西村先生の渾名で、その由来は先生の趣味であるトライアスロンだ。真冬に半袖でいるのも理由の一つだけだ。

鉄「はあ、まあいい。ほら、振り分け試験の結果だ」

そう言っつて僕達に封筒を差し出す。別に見なくてもわかるんだけだな。

鉄「試験監督の先生から話は聞いたが、お前達は人間として正しいことをした。先生は大変誇りに思う」

明「そう言っつてくれるとうれしいです」

夏「友達が倒れたらほっとけないだろ」

鉄「ふっ、それもそうだな。早く行け。本当に遅刻するぞ」

明・夏「はい！」

吉井明久 Fクラス

南夏奈 Fクラス

こうして、僕らの最低クラスの生活が幕を開けた。

## 二人のバカの新学期（後書き）

バカテストはあったりなかったりするかもです。

## 再開と編入生とFクラス（前書き）

### 問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- （1）得意な事でも失敗してしまう事
- （2）悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え

- （1）弘法も筆の誤り
- （2）泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、（2）なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

土屋康太の答え

- （1）弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね

吉井明久の答え

- （2）泣きつ面蹴ったり

教師のコメント

君は鬼ですか

シルフィ・マテリアの答え

(2) マヒ状態にエアスラッシュ (トゲキッス)

教師のコメント

先生もポケモンは好きです。

藤崎一樹の答え

(2) メルトン連打

教師のコメント

先生はディシディアも好きです。



## 再開と編入生とFクラス

明「……なんだろう、このバカでかい教室は」

去年はほとんど来たことがない三階に足を踏み入れると、まず目に入ったのは、通常の5倍はあろうかという広さを持つ教室だった。

夏「これがAクラスの教室か……まるで高級ホテルのロビーだな」

ノートパソコンにリクライニングシート、冷蔵庫まである。極めつけは個人エアコン。

夏「この教室の写メ撮ってチアキたちに見せたら何人教室だって気づくかな？」

明「誰もいないと思うよ。って、そんなことより僕達も早く自分の教室に行こう」

僕達は走らない程度に急いで教室に向かった。

カナside

夏「これは……Aクラスと違う意味ですごいな」

私たちの目の前にあるのはFクラスの教室……だと思つ。プレートに『2・F』って書いてあるし。

明「教室というより廃屋だね」

夏「1年こんな教室で過ごすのか……」

愚痴をいいながら扉を開ける。

夏「すみません。遅れまし「早く座れ、ウジ虫やろ……ゲツ、カナ！」……た？」

あれ？いきなり罵倒された？遅刻しただけでウジ虫扱いされた？あ、ちよつと泣きそつだ。

明「雄二、覚悟はいい？」

雄「まで、明久！その物騒なものをしまえ！」

明「大丈夫、峰打ちで済ませてあげるから」

雄「木刀に峰打ちもクソもあるか！」

？「あきひさ、こんなことで涙鳥使つちやダメだよ」

ん？この声は…

夏「シルフィ！お前もFクラスだったのか！」

小4の頃からの幼馴染、シルフィ・マテリア。かなり自由な性格で、けっこう気が合う。

明「シルフィ…そうだね。雄二なんか涙鳥使っちゃダメだよね」

そういうと明久は涙鳥をボックスに戻す。

雄「シルフィ、助けてくれるのか!？」

シ・明「もっと過激な武器じゃなくちゃ？」

たくさんボックスがカバンから出てくる。少なくとも20個はありそうだ。

雄「チクシヨー!!!」

あ、逃げた。

シ「とりあえずあのゴリラはほっといて、やっほー、あきひさ&カナ。今年もよろしく」

明「うん。よろしく」

夏「おう！でも意外だな。シルフィならBクラスかCクラスくらい行けただろ」

シルフィは数学・物理・科学が天才級でその3教科で全体の9割を

取っている。一年の時の模擬振り分け試験ではその3教科と英語で2000点を超えた。ただ、その4つ以外の教科になるとてんでだめで、明久よりヒドイ教科もあった。

シ「中途半端なクラスに行ってもおもしろくなさそうだしね。だったら一番下のクラスでバカやる方がいいと思ったんだ。知り合いも多いだろうし、なによりあきひさとカナは絶対いると思ったしね」

明「僕とカナが他のクラスに行くことは考えなかったの？」

シ「微塵にも」

失礼な！

夏「私も明久もそこまでバカじゃないぞ！」

シ「『 $\text{CH}_3\text{COOH}$ 』とは何でしょう？」

明「……英語は苦手なんだ」

夏「日本人なんだから英語なんて必要ない！」

シ「化学の問題なんだけど、ちなみに答えは『酢酸』ね」

夏「ひっかけか!？」

シ「ちがうよ」

？「朝からお主らは元気じゃのう」

明「あ、秀吉。おはよう」

秀「おはようなのじゃ」

こいつは木下秀吉。同じく幼馴染で爺口調が特徴的。一応男なんだが、女としか見られないくらいかわいい。

夏「秀吉見て思い出したんだが、あいつ今日帰ってくるんだろ？」

あいつとは、去年イギリスに留学という名目で、別次元に行くというんでもないことをやらかしたやつだ。ちなみに、このことは、この学校では私と明久、シルフィに、木下姉弟しか知らない。

シ「うん。てか、もう来てるよ。今は職員室にいる」

秀「なぜワシを見てその話を思い出したんじゃ？」

明「まあ秀吉には負けるけど、結構女の子っぽい顔してるからね。ポニーテールだし」

秀「こんなことで勝っても嬉しくないのじゃ！」

シ「はははっ。おっ、先生来た」

先生が来たのを見て、皆席に着いた。どうやら席は自由のようなので、窓際の後ろの方に固まって座った。

福「えー、皆さんおはようございます。2年Fクラスの担任になり

ました福原慎ふくはらしんです。よろしくお願ひします」

福原先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。チヨークすら支給されてないのかよ。

副「では、はじめに転入生を紹介します」

F「先生、女子ですか!?!」

副「はい女子が二人、男子が一人です」

F「よつつつしゃあああああ!」

多分男子一人の部分は聞いてないんだろっな。

副「それでは入ってください」

先生の合図で3人の生徒が入ってきた。

副「では、自己紹介をお願いします」

一「はい。藤崎一樹です。去年1年間イギリスに留学していました。よろしくお願ひします」

あいつが私たちの幼馴染で別次元に行ったやつだ。顔がきれいでポニテだから普通に女に見えるが、れっきとした男だ。

一「あと、僕は男です」

F「バカなっ!?!」

うそつく理由がどこにある？

ティ「ティアナ・ランスターです。イギリスから来ました。よろしくお願ひします」

ティアナは一樹とシルフィのイギリスでの幼馴染らしい。写真とかビデオとかで何度か見たことがある。

ス「スバル・ナカジマです。一年間よろしくお願ひします！」

この人は初めて見るな。おそらく別次元で出会ったんだろう。

……別次元の人間って、連れて来て大丈夫なのか？

**再開と編入生とFクラス（後書き）**

明久はカナのことになるとキレやすくなります。

姫路さんは次回から出ます。



## バカとバカ共の自己紹介（前書き）

やっと投稿できた！いろいろあって時間がかかってしまいました。

## バカとバカ共の自己紹介

一樹 side

福「席は特に決まってないので、好きな所に座ってください」

席も決まってないのか、普通は出席番号順だったりするんだけど。

ラッキーと思いつつ、明久たち幼馴染グループが集まってる所に座った。

明「久しぶりだね。一樹」

秀「久しぶりじゃのう、一樹」

一「うん、久しぶり、明久、秀吉」

夏「ランスターははじめまして、か？」

ティ「ビデオで何度か見たけど、直接会うのは初めてだしいいんじゃないかしら」

夏「そうだな、はじめましてランスター、ナカジマ」

ス「うん。はじめまして、それとスバルでいいよ」

ティ「私もティアナでいいわよ」

夏「わかった。私もカナでいいよ。よろしくスバル、ティアナ」

明「僕は吉井明久。よろしく」

秀「木下秀吉じゃ。よろしくのう」

ス「カナ、明久、秀吉ね。うん、よろしく！」

二人とも馴染めそうだ。よかった。

ム「……………土屋康太」

おっと、いつの間にか自己紹介が始まっているようだ。

あいつは確か去年の自己紹介で……………

ム「……………土屋康太。趣味は盗さ　なんでもない。特技は盗ち

よ　特にない」

とか言ってたやつだな。おまけにポケットからデジカメとボイスレコーダーがこんにちはしてた。

秀「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

相変わらず女つばいな秀吉は。そういえば、六課にいたとき、エリオとキヤロに中学の卒業式の時の写真見せたら、

キヤ「どうしてこの人女の子なのに、一樹さんと同じ制服を着てるんですか？」

「『ああ、そいつ男だよ』

エリ・キャ『え!?!』

秀吉には悪いけどあまりにも予想通りの質問と反応だったから笑ってしまったのを覚えている。

にしても、男女比の偏り具合がものすごいな。見渡す限り男子、男子、男子だ。

？「 です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

つと、考えている間にまた次の人だ。

？「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は」

お、女子か。

？「趣味は吉井明久を殴ることです」

とんでもない趣味をカミングアウトしたな。ほら、明久が若干怯えてるぞ。

明「あう。し、島田さん」

美「はろはろ了。吉井、今年もよろしくね」

今年も?ということは去年同じクラスだったのか。ってことは僕も

同じクラスだったってことだが、全く覚えてないや。1週間しか通ってないもん。仕方ないよね！

夏「南夏奈だ。島田と被るからカナって呼んでくれ」

次はカナか。しかしシンプルな自己紹介ばっかだ（お前が言つな）。誰か面白いことを言ってくれないものか。

明「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

F『ダアアアーリイーン!!』

野太い声の大合唱。これはすさまじく不愉快だな。

明「失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願いします」

夏「明久……」

ス「さすがに今のはちょっと……」

明「そんな残念なものを見る目で僕を見ないでっ!」

口には出さないが、僕とティアも批判の目で明久を見ている。

?「あの、遅れて、すいま、せん……」

F『えっ?』

教室全体から、驚いたような声上がる。

福「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもよろしくお願いします」

瑞「は、はい！あの、姫路瑞樹といます。よろしくお願いします

……」

「はいっ！質問です！」

自己紹介を終えた男子生徒の一人が高々と手を挙げる。

瑞「あ、は、はいっ。なんですか？」

「なんでここにいますか？」

聞きようによつてはかなり失礼な質問だが、これは彼女を知ってる誰もが思う疑問だろう。なにせ成績がものすごい。中学の時は、入学から卒業までにおこなったあらゆるテストすべてで1位を納めるほどの成績だ。高校になってからのことはよくわからないけど、変わらず一桁台には入っているんだろう。

瑞「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

これは…予想以上にバカばかりだ。

ス「私もエリオ達が心配で全力を出し切れなくて……」

ー「ウソつけ。テストが終わったと勝手に晩御飯のリクエストしてくるやつはそんなこと考えないだろ」

ティ「それに、アンタ『全力を尽くした！』とか言ってたじゃない」

ス「うっ……」

もう一人バカがいた。

瑞「き、緊張しましたあゝ……」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏す姫路。

明「あのさ、姫「やつほー、みずき」」

明久の声とシルフィの声が被って、明久の声が遮られた。すっごい悔しそうな顔してんなー。

瑞「あ、シルフィちゃんもFクラスだったんですか」

シ「うん。こっちの方が面白そうだしね。ところで、体調はもう大丈夫なの？」

明「あ、それ僕も気になる」

おお、無理やり会話に入った。

明「よ、吉井君!？」

明久の顔を見て、驚く姫路さん。

シ「みずき、あきひさがブサイクでごめん」

明「シルフィ、それはフォローなの？」

夏「明久はブサイクなんかじゃないぞ!むしろすっごいかっこいいんだからな!」

瑞「そ、そうですよ!目もぱっちりしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ!」

シルフィに猛反発してる二人。二人とも明久が好きなんだよな!。本人は全く気付いてないようだけど。

シ「ははっ。ごめんごめん。でも確かに見た目は悪くないかもしれなないね。私の知り合いにも明久に興味を持ってる人いたし」

明「え?それは誰　「それって誰だっ(ですかっ)!？」

また遮られてるよ。二人とも必死だな。



シ「たしか久保」

久保さんか。明久を好きになるなんて、どうやら見る目は確か  
シ「利光だったかな」

久保利光 （性別ノオス）

じゃないな。その人には絶対かわらないようにしよう。

明「……………」

どうやら明久にはショックが大きすぎたようだ。声を殺してさめざめと泣いている。

シ「大丈夫だよあきひさ。半分は冗談だから」

明「え？残り半分は？」

シ「ところで、みずきはもう体大丈夫なの？」

瑞「あ、はい。もうすっかり元気です」

明「ねえ！のこりの半分は！？」

福「はいはい、その人たち、静かにしてくださいね」

パンパン 先生が教卓を叩く音

バキィツ 教卓が破壊された音

バラバラ 教卓がゴミ屑と化した音

まさか軽く叩いただけで壊れてしまうとは、最低クラスだからっていくらなんでも酷過ぎる。

福「え〜……替えを用意してきます。少し待っていて下さい」

気まずそうに告げると先生は足早に教室を出て行った。

ティ「いくらなんでも酷過ぎないかしら」

ス「私もそう思うな」

二人とも苦笑いをしている。

明「……一樹、ちょっといい？」

「ん？どうした？」

明「ここじゃ話にくいから、廊下で」

「別にいいよ」

立ち上がって廊下に出る。教室じゃ話にくい話ってなんだろう？

## バカとバカ共の自己紹介（後書き）

前回雄二がログアウトしたので、どうしようかと思ってたんですが、オリキャラ共で代用しようという考えになりました。

……なんでこんな簡単なことをすぐに思いつかなかったんだろう。

## バカと理由と宣戦布告（前書き）

以下の文の（ a ）を答えなさい。

第二次世界大戦が始まる前、日本はドイツ、イタリアと軍事同盟を結んだ。このときドイツを指揮してたのがナチスのヒトラーであり、イタリアではファシスト党の（ a ）だった。

姫路瑞樹・藤崎一樹・ティアナ・ランスターの答え

ムツソリーニ

教師のコメント

正解です。ムツソリーニはじめはヒトラーのことをよく思っていなかったそうですよ。

土屋康太の答え

……俺じゃない！

先生のコメント

あたりまえです。

姫路瑞樹・藤崎一樹・ティアナ・ランスター・土屋康太以外のFク

ラスの答え

ムツソリーニ

先生のコメント

何人が間違えて をつけてしまいました。

## バカと理由と宣戦布告

明久side

—「んで、話って?」

HR中というだけあって、廊下に人影はない。ここなら安心して話  
ができそうだ。

明「この教室についてのことなんだけど……」

この教室とは言うまでもなくFクラスのことである。

—「Fクラスか。確かに予想以上にヒドイね」

明「一樹もそう思うよね?」

—「うん。で、Aクラスに『試召戦争』を仕掛けよう」と

明「さすがだね。そうだよ」

やっぱり一樹に相談して正解だったね。全部言わなくてもこっちの言  
いたいことをちゃんと理解してくれる。雄二だったらこう簡単には  
いかないだろう。

—「試召戦争ね……実は僕もやってみたいと思ってたんだ。こんな  
面白そうなおもちゃがあるんだ。遊ばなきゃ損でしょ」

そう言って一樹はニヤリと笑う。

明「そう言つと思つた」

つられて僕も笑つてしまつ。

「……と、言つてみたはいいが、結局のところ試召戦争を仕掛けるには代表の権限が必要だ。うちのクラスの代表分かる？」

明「代表か……そう言えば誰だろう？」

自己紹介の時も、まだ一人も代表だつて名乗つてなかつた気がする。

？「俺だ」

突然後ろから声をかけられた。

明「雄二！どこ行つてたのさ？もうホームルーム始まつてるよ」

雄「テメエとシルフィのせいだろうが！……それより、試召戦争をやるのか？」

明「うん。この設備はあまりにも酷過ぎるからね」

雄「ふん、まあいいだろう。それに俺自身もAクラス相手に試召戦争をやるうと思つてたところだ」

明「意外だね。てつきり雄二は興味ないと思つてたけど」

雄「世の中学力がすべてじゃないつて、そんな証明を試してみたくな。……おつと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

？雄二の言いたいことはよくわかんないな。雄二に促されるまま、僕達は教室に戻った。

—「最弱対最強か、イイね。燃える展開だ」

一樹のつぶやきは、僕の耳にはつきりと聞こえた。

ティアナside

あ、一樹たち戻ってきた。……ん？あの赤い髪の人は何だかしら？

ティ「一樹、何の話してきたの？それにあの人は？」

—「ああ、両方ともすぐにわかるよ」

ティ「？」

福「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ」

雄「了解」

先生に呼ばれてさっきの赤い髪の人が教壇に立つ。

雄「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

代表ということは、彼がこのクラスの最高成績者なのか。

雄「さて、皆に一つ聞きたい」

間の取り方が上手いせいか、全員の視線が代表に向けられる。代表の視線はこのクラスの各所に移りだす。

カビ臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れたちゃぶ台

雄「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

一呼吸をいて、静かに告げる。

雄「不満はないか？」

F「大ありじゃあつ！！」

2年F組生徒の魂の叫び。うう、耳がキンキンする。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」



『そつだそつだ!』

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ! 改善を要求する!』

『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ! あまりにも差が大きすぎる!』

次々と上がる不満の声。

雄「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは代表としての提案なんだが、FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思っ」

Fクラスの代表は戦争の引き金を引いた。なるほど、一樹たちが話してたことってこのことだったのね。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

『ランスターさんに罵られたい』

—「おい誰だ今の変態発言」

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる……最後の方は無視しておこっ。

確かに、AクラスとFクラスの戦力差は火を見るより明らかだ。

雄「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

それを知りながらも、代表はそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『出来るわけ無いだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

雄「根拠ならあるさ。それを今から説明してやる」

不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす代表。

雄「おい、康太。いつまでも姫路のスカートの中をのぞいてないで、前に出てこい」

ム「……………！！（ブンブン）」

瑞「は、はわっ！」

必死に手と顔を左右に振って、否定のポーズをとる康太と呼ばれた男子生徒。あいつにはあまり関わらない方がよさそうね。

顔に着いた畳の跡を隠しながら壇上に上がった。あそこまで恥も外聞もなく低い姿勢から覗き込んでたら否定のしようがないともう。

雄「土屋康太。こいつがあムッシュの有名な寡黙ムッシュなる性職者だ」

ム「……………！！（ブンブン）」

……………彼にふさわしいと言えばふさわしいが、これほどひどいあだ名は初めて聞いた。

『バカな、奴がそうだと言つのか？』

『だが見る、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしてるぞ？』

『ああ、ムッツリの名に恥じない姿だ』

瑞「ムッツリーニって、どっいう意味ですか？」

夏「あー…姫路は知らなくていいと思うぞ」

瑞「????？」

姫路は頭に疑問符をたくさん浮かべてるようだ。

雄「姫路のことは説明するまでもないだろう。皆だってその実力を知ってるはずだ」

瑞「えっ？わ、私ですかっ？」

雄「ああ、うちの主戦力だ。期待している」

『そっだ、俺達には姫路さんが居るんだっ！』

『彼女なら、Aクラスにも引けを取らない』

『ああ。彼女が居れば何もいらぬ』

だれ？さっきから姫路にラブコールしてるのは。

雄「まだあるぞ。シルフィ、ちょっとこい」

シ「へい」

間の抜けた返事をしながら、シルフィが前に出る。

雄「去年おこった『地獄の暴走召喚事件』っ覚えてるよな？」

『ああ、あの生徒と教師全員の召喚獣が強制召喚された奴か』

『あんときは大パニックだったよな』

『でも、あの事件の犯人って、結局見つからなかったんだよな？』

雄「そうだ。そしてこいつが事件の犯人だ」

『えっ！？』

皆から驚きの声上がる。

テイ「何やってんのよあんた……」

シ「いやあ、あまりにも暇だったもので」

—「そんな理由で大事件起こすなよ……」

一樹が頭を抱えている。シルフィはむかしっからこうだけど、さすがに呆れるわよね。

雄「木下秀吉だっている」

『おお……！』

『ああ。あいつか、確か、木下優子の……』

雄「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうなやつだ』

『坂本って、小学生のころは神童とか呼ばれてなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験のときは姫路さんと同じく体調不良だ』

ったのか』

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな!』

いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気は教室内に満ちていた。  
気が付けば、クラスの士気は確実に上がっていた。

雄「それに、吉井明久だっている」

……シン

そして一気に下がる。

明「ちよつと雄二!どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ!全くそんな必要はないよね!」

雄「だまれ、てか明らかにお前がこのクラスで一番強いだろ、『蒼炎の刃』……いや、『グリーンベガサス翠毛の天馬』もいるから2番目か」

一「……なんでそれを言うかな、『悪鬼羅刹』さん?」

一樹が代表を睨む。

ス「蒼炎の刃にグリーンベガサス翠毛の天馬?なに、それ?」

秀「こやつらの二つ名じゃ、それぞれ明久の木刀に蒼い炎をまとわせて戦う姿から、一樹の戦い方と能力を使うときの髪の色からついた名じゃ」

ス「へえ〜。確かに一樹の戦い方って、自由に駆け回るって感じだよね」

シ「きまっただ型がほとんどないからね。武器もちよくちよく変わるし」

一「好きじゃないんだよねその名前。厨二くさいし」

テイ「え？かつこいいじゃない。グリーンペガサス」

一「ティアまで……お願いだからその名前で呼ばないで」

どうやらホントに嫌いみたいね。泣きそうだし。

『おいおい……なんてやつらが集まってやがる』

『たしか中学の時に相当腕鳴らしてたやつらだろ？』

腕を鳴らしてたって……

テイ「一樹あなた……不良になっちゃったの？」

これは何かの間違いよ……私の幼馴染が不良なんかになるはずがっ！

一「ちがう！むしろ逆だ。僕と明久は不良を駆逐してたんだよ」

明「駆逐って……もっと言い方考えようよ」

ス「じゃあ、一樹と明久は正義の味方ってこと？」

一「まっ、そーゆーことだ」

テイ「よかった……」

安心したあ……一樹が不良なんかになるわけないよね。

秀「一概に正義とは言えんがの」

ぼそつと、木下が何か言った。

ス「ん？秀吉、何か言った？」

秀「いや、なんでもないのじゃ」

雄「話を戻すぞ。なぜこいつなのか、それはこいつの肩書きが『観察処分者』だからだ」

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

明「ち、違うよっ！ちよつとお茶目な16歳につけられる愛称で」

雄「そうだ。バカの代名詞だ」

明「肯定するな、バカ雄二！」

ス「ねえ、観察処分者って何？」

スバルが代表に質問する。編入してきた私たちには馴染みのない言葉だしね。

雄「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用

を、特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすといった具合だ」

シ「召喚獣の力は明久程度の点数でもかなり力が強いんだ。だからそういった力仕事に向いてるんだよ」

ス「へえ、すごいんだね明久は」

明「あはは、そんな大したものじゃないんだよ」

シ「召喚獣は先生の承認がないと召喚できないし、なにより召喚獣の負担が何割か操縦者に帰ってくるんだ。攻撃をくらったりすると明久自身も痛いんだよ」

『つまりおいそれと召喚できないやつが一人いるってことか』

秀「じゃが雄二よ、観察処分者だからというのならカナも該当するのではないか？」

夏「ばっ…それを言うなよ！隠しときたかったのに！」

カナも観察処分者なのか。でも、代表が指名するってことは何かあるはずよね。

雄「確かにカナも該当するが、明久とカナでは決定的な違いがあるからな」

瑞「違い……ですか？」

明「そうだ。観察処分者は教師の雑用を多くこなすことで、召喚獣



の扱いに慣れて、細かい動きができるようになるんだ。そして、明久は剣の扱いに長けている。つまり召喚獣で自分の剣術を使うことができるんだ」

シルフィに聞いた話だと、召喚獣は扱いが難しいらしい。だとすると、それはかなりメリットになるんじゃないかしら？

ー「明久はすごいよ。なのはん家で徹底的に基礎を学び、そのあと藤崎家と八神家で猛特訓だからね。シグナムと同じくらい強いよ」

ティ「えっ！？それってかなり強いってことじゃない！」

シグナムさんとは模擬戦でも一度も勝つたことがない。というより、シグナムさんはなのはやフェイトと互角に戦える数少ない一人。それと同じくらいってことは、私たちよりも強い。

美「吉井にそんな特技があったなんてね。知らなかったわ」

明「去年はそんなに使ってないからね」

雄「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

雄「ならば全員ペンをとれ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

雄「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

ス「おおーっ！！」

テイ「皆やる気満々ね。一樹はどうすんの？」

まあ、聞くまでもないだろうけど。

一「きまつてるでしょ。焚きつけたのは僕だし、そうじゃなくてもこんな面白いイベント、参加しなけりゃもったいないっしょ！」

ほらね。

テイ「だと思った」

自然に笑みが浮かぶ。一樹が参加しないわけないよわよね。

雄「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

明「下位勢力の宣戦布告の使者って大体酷い目に遭うよね？」

夏「大役っていうくらいなら自分で行けよ」

カナが代表に食ってかかる。本当にその通りだと思っ。

雄「代表がボロボロになって帰ってきたら士気にかかわるだろ？そ

の点、明久なら問題ない。たしかに戦力ではあるが、別に居なくてもやっついていける程度だしな」

明「やっぱり酷い目に遭うんじゃないか！せめてそこは否定しろ！」

雄「うるせえ。ゴチャゴチャぬかしてないでさっさと逝ってこい」

字が違うわよ代表。

明「今逝ってって言ったよね！？こうなったら何が何でも行かない！」

ス「ねえ、二人とも」

雄「ん？なんだナカジマ」

スバルが割って入る。……あれ？一樹はどこ行ったのかしら？

ス「宣戦布告ならもう一樹が行ったよ」

……え？

明「ス、スバル、今何て？」

ス「え？だから宣戦布告は一樹が行ったよって」

明・ティ「どうして止めない！」

ス「えっ、どうして止める必要があるの？」

スバルを無視して私と吉井は走り出す。目指すはもちろんDクラス。

ティ「間に合わない」と

明「Dクラスの生徒が大変なことになる！」

一樹がDクラスで行うであろう行動

?、宣戦布告      Dクラス生徒が飛びかかる      魔法使っては  
じき返す      Dクラス生徒重症

?、宣戦布告      Dクラス生徒が飛びかかる      魔法を使つて  
床に沈める      Dクラス生徒重症

?、宣戦布告      Dクラス生徒が飛びかかる      そのまま窓に  
向って投げつける      Dクラス生徒死亡

……最悪なビジョンしか浮かばない。?だったら本気でシャレんな  
んないわよ!。

## バカと理由と宣戦布告（後書き）

書いてたらいつの間にか長くなってたんで、いったんここで区切り  
ます。

## ガスタの宣戦布告とミーティング（前書き）

やっとまた一話投稿です。まだ試召戦争やってない……

小説って難しいですね。

## ガスタの宣戦布告とミーティング

一 樹side

一 「Dクラス代表は誰？」

扉を開けると同時に言い放つ。

？「俺だけど、何か用かな？」

一 「君がこのクラスの代表か。僕はFクラスの藤崎一樹。男ね。よろしく」

一 瞬えっ！？という顔された。わかっていたこととはいえ、男だと思われてないのは結構傷つく。

源「俺は平賀源二。よろしく。で、何の用かな？」

一 「いや、下位クラスからの訪問者で代表に用があるって言ったら答えは一つでしょ」

そして、少し睨みつけるようにしながら言い放った

一 「僕たちFクラスは、アンタらDクラスに試験召喚戦争を申し込む！！」

ぽかんとするDクラス。さて、ここからどうなるか……

『ハハハハッ』

大爆笑の嵐に包まれた。冗談として受け止められたか。

源「何を言ってるんだい藤崎君？ 試召戦争なんかしてもFクラスなんか勝てるわけないじゃないか」

むっ、今の言い方ちょっとイラつときた。

一「なんだ、負けるのが怖いんだ」

源「……なに？」

Dクラス共の表情が固まった。よし、この調子で……

一「拍子抜けだな。Dクラスは下位クラスの宣戦布告もまともに受けられないチキン共の集まりなのか。……よしっ、さっきの宣戦布告は取り消すよ。こんなチキンクラスと戦っても意味ないからね。代表と相談しなおして他のクラスを攻めることにするよ」

精一杯の皮肉を込めた笑みをしながら、Fクラスに戻ろうとする。

『調子のとってんじゃねえぞ、テメエ！』

Dクラス男子が飛びかかってきた。

一「血の気が多いね。でも、まっすぐ突っ込んできても」

僕の髪と目が緑色になり、風が吹き荒れ、突然そいつが地面に叩きつけられる。



「がつ……！？」

「僕には届かないよ」

やったことは簡単だ。彼の上に空気を圧縮して球を作り、能力を解除して爆発させた。原理としては、宇宙でシャツルのハッチを開けると空気が大量に出ていくのと同じような感じだと思う。

明「ああっ！間に合わなかった！」

ティ「なにやってんのよ一樹！」

「あ、明久にティア。どうしたの？そんな慌てて」

明久とティアが走ってきた。FクラスとDクラスは結構距離あるのになにしてんだろ？

ティ「あんたが能力使って大変なことを起こさないように止めに来たのよ。間に合わなかったけど」

「ひどいな、その言い方じゃちから使うこと前提じゃん」

ティ「これは何よ」

ティアがさつき飛びかかってきた生徒を指さす。カエルみたいに潰れている上に言葉のナイフが一本ぶっすりと刺さっている。

明「いまさらってこれって言ったよね？」

ティ「そんなことはどうでもいいの！」

二本目が刺さった。さり気にひどいですよティアナさん。

明「とりあえず、宣戦布告はしたんでしょ。教室に戻ろう?」

一「そうだね。つーわけで、代表さん、開戦は今日の午後ね」

源「え?さっき取り消すって……」

一「後ろを向くと幸せになれるかもよ」

平賀が自分の教室を見る。そこには

『上等だ!FクラスなんかじゃDクラスに到底及ばないことを教えてやる!』

『おおー!』

土気MAXの生徒がいっぱい居た。

一「んじゃ、そーゆーわけで、また後でね」

ティ「あ、ちょっと待ちなさい!話は終わってないわよ!」

僕たちはDクラスを後にし、自分たちの教室に戻った。

一「ただいま」

瑞「あ、お帰りなさい。さっきすごい音がしたけど何かあったんで

すか？」

明「あー……ちょっとね」

雄「んで、宣戦布告はしてきたのか？」

ー「うん。今日の午後でいいでしょ？」

雄「ああ、問題ない」

美「ずいぶん急ね。明日とかでもよかったんじゃない？」

ー「こんな腐った畳からさっさとおさらばしたいからね」

とりあえず建前を言っておく。早く遊びたいからなんて言わない方がいいかもしてない。

テイ「早く遊びたいからじゃないの？」

さすが幼馴染。ばっちり僕の気持ちが分かってらっしゃる。

雄「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

他の場所で話し合いをするつもりらしく、坂本は扉をあけて出て行った。

ー「僕たちも行くのか」

シ「そうだね。作戦とか考えなくちゃいけないし」

ス「いや〜面白くなってきたね」

ティ「あんたらほんとこっぴつこの好きね」

一「ティアも好きでしょ?」

ティ「まあね」

僕たちも坂本の後を追って教室を出た。

明久side

夏「はい明久。今日のお弁当」

カナが僕に弁当を差し出す。

明「ありがとうカナ。ハルカちゃんと作ってくれたんだ」

僕の弁当は基本自分で作るけど、今日みたいに寝坊したりして作る時間がないとハルカが作っておいてくれる。本当にいい幼馴染を持つたよ。

雄「んじゃあ、ミーティングを始めるぞ」

秀「雄二。一つ気になってたんじゃがどうしてDクラスなんじゃ? 段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負にでるならAクラス

スじゃろう?」

瑞「そういえば、確かにそうですね」

雄「まあな。当然考えがあつてのことだ」

雄二が鷹揚にうなづく。

瑞「どんな考えですか?」

雄「いろいろと理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めないのは簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

明「え?でも、僕らよりはクラスが上だよ?」

成績でクラスを分けられているので、Eクラスは当然僕らのいるFクラスよりも振り分け試験の点数は良い。それなのに戦うまでもないなんて。

雄「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうの方が強かったかもしれないな。けど、実際のところは違う。お前周りにいる面子をよく見てみる」

雄二に言われたとおりにもその場にいるメンバーを見回してみる。ふむふむ、この場には、

明「美少女が3人とバカが2人、あと、幼馴染が4人とムツツリが1人いるね」

雄「誰が美少女だと!?!」

明「ええっ！？雄二が美少女に反応するの！？」

ム「……………（ポツ）」

明「ムツツリーニまで！？どうしよう、僕だけじゃツツコミきれない！」

夏「明久にバカとは言われたくないな！」

明「いや、君は明らかに幼馴染でしょ！」

まさかカナまでやってくるとは思わなかった。

美「もう、恥ずかしいじゃない。私が美少女だなんて」

明「え？島田さんはバカあぶなっ！？いきなり回し蹴りしないでよ！」

不穏な気配がしたので頭を下げると、ブンと音をたてて、島田さんの脚が僕の頭をかすめた。

ス「落ち着いて美波！」

スバルが島田さんを羽交い絞めする。

美「離してスバル！今日こそこいつを殺さなくちゃならないの！」

ム「……………（ブシャアア！）」

さすがムツツリーニ。どんな状況でもスカートの中を見逃さないよ  
うだ。

秀「まあまあ、皆落ち着くのじゃ」

雄「そ、そうだな」

明「いや、その前に美少女で取り乱すことの対してツッコミ入れた  
いんだけど」

雄「ま、要するにだ」

コホンと咳払いをして雄二が説明を再開する。無視ですか。

雄「姫路に問題がない今、正面からやりあってもEクラスには勝て  
る。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が  
ないってことだ」

夏「じゃあ、Dクラスと正面からぶつかると厳しいのか？」

雄「ああ、確実に勝てるとは言えないな」

ス「だったらはじめからAクラスに挑もうよ」

明「スバルの言うとおりだよ。僕たちの目標はAクラスであってD  
クラスじゃないんだ。勝てるか分らないなら始めからAクラスとや  
りあうべきだと思う」

雄「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？そ  
れに、打倒Aクラスに必要なプロセスだしな」

「もう詳細な作戦を考えてるわけ？流石元神童。頭の回転が違っ  
ね」

雄「まあな、いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

根拠のない言葉なのに、なぜかその気になってくる。雄二の言葉に  
はそんな力があつた。

美「いいわね。面白そうじゃない！」

秀「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

夏「私たちの力を見せてやろう！」

「あんな腐った畳はごめんだしね」

ティ「やるからには勝つわよ！」

ス「よし、やるぞー！」

ム「……………（グッ）」

瑞「が、頑張りますっ」

雄「そうか、それじゃ作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、僕らは勝利のための作戦に耳を傾けた。



・  
・  
雄「以上が今回の作戦だ。皆しくじるなよ」

皆「おう（はいっ）！」

ミーティングが終わり、僕らは自分たちの教室に戻った。初めての  
試召戦争だ。絶対勝ってやる。

シ「あ、かずきとティアナとスバルは練習を兼ねてデータ収集をやるから、今回は出れないからね」

ー「ティ・ス「え？」」

## ガスタの宣戦布告とミーンディング（後書き）

今回は姫路の殺人弁当フラグはありません。

## ガスタとスターズとそれぞれの武器（前書き）

問題：技術

以下の略語の名称を答えなさい。

? P C   ? B D   ? U S B   ? I C   ? A I

シルフィ・マテリアの答え

? P e r s o n a l C o m p u t e r   ? B l u - r a y D i  
s c   ? U n i v e r s a l S e r i a l B u s   ? I n t e  
g r a t e d C i r c u i t   ? a r t i f i c i a l i n t  
e l l i g e n c e

先生のコメント

さすがですね。すべて英称で答えてくれたのはあなただけです。

姫路瑞樹の答え

? パーソナルコンピュータ   ? ブルーレイディスク   ?   ? 集積  
回路   ? 人工知能

先生のコメント

? は分かりませんでしたか。他に比べてあまり聞かないのではありませんでしょうか。

スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、藤崎一樹、吉井明久、  
南夏奈、木下秀吉の答え  
? バルディッシュ

先生のコメント

なぜ技術の問題で16〜18世紀の東ヨーロッパからロシアにかけて使われた武器が出てくるのでしょうか？

## ガスタとスターズとそれぞれの武器

一樹 side

皆と一緒に盛り上がって、やる気MAXだった僕・ティア・スバルは教室に戻る途中シルフィよりはなたれた言葉のおかげで試召戦に参加できず、僕たちは空き教室にいる。

ティ「練習はいいとして、データ収集って何やるのよ？」

シ「バリアジャケットとデバイスを召喚獣に適合させるため、って言えば大体間違いはないね。召喚獣の武器と自分が主に使ってる武器が違ったらやりにくいでしょ？」

確かに。スバルの武器がライフルだったり、ティアの武器が薙刀だったりしたらうまく使えないかもしれない。

ス「でもいいのそれって？」

シ「召喚獣の改造をしてはいけないなんていうルールはないでしょ？」

それはまさかそんなことを出来る奴はおるまいと思ってたからできなかったただだと思っただけど……

シ「じゃあ始めるよ。まずは召喚獣を召喚して」

一「あれ？召喚獣って確か教師の立ち合いがないと召喚できないんじゃないかったっけ？」

シ「大丈夫だよ。私のパソコンにデータ入ってるから」

ホントにこいつは去年何してたんだろう。そう思っていると、シルフィのパソコンから、フィールドが展開される。

召喚獣を召喚するのは当然初めてだ。僕の召喚獣はどんなのだろう？

一・テイ・ス「サモン試獣召喚！」

床にミッドともベルカとも違う魔方陣が展開される。そこから、それぞれの召喚獣が現れた。

ス「私の武器はメタルグローブだよ。これなら武器のことは気にしなくてよさそうだね」

テイ「私のは二丁拳銃か。私も大丈夫そうね」

スバルの装備は胴着に関節をよけて金属が埋め込まれているメタルグローブ。ティアのはゲームで出てくるようなけっこう露出の多い女銃士みたいな格好に二丁拳銃。基本的に武器タイプはデバイスと変わらない。さて、僕のはどうか。武器はいろいろ使えるから何が出てても大丈夫だと思うけど…………

武器 …なし

頭装備 …なし

上半身装備 …Tシャツ&パーカー

下半身装備 …ハーフパンツ

腕装備 …なし

足装備 …スニーカー

—「……………」

もしかしたら目が疲れてるのかも入れない。目を擦ってもう一度自分の召喚獣を見る。

武器 ……ドラえもんのようにまるい手（素手）

頭装備 ……黒髪のポニーテール

上半身装備 ……星マークがプリントされたＴシャツ（女物）&ピンクのパーカー（女物）

下半身装備 ……スマイルとかのワッペンが付いているハーフパンツ（女物）

腕装備 ……綺麗な肌

足装備 ……白基調のスニーカー（女物）

—「この女子小学生だよ!？」

ものすごい泣きたくなってくる。コンピューターにまで女扱いされるとは。

ティ「……………大丈夫よ。一樹のことは、私が一番分かってるから……………」

—「ティア……………」

ティアのやさしさがとつても身にしみる。

ス「そうだよ。それに、とってもにあ……………じゃなくて、かわいいよ?」

—「今にあってるって言おうとしたでしょ!?!それに言い換えても

意味ないからね!？」

スバルの言葉がとっても心に刺さる。

シ「素手つてところが気になるな、0点でも木の棒くらいは握つて  
と思うんだけど」

一「武器より服装の方が気になるんだけど」

シ「そんなの昔よく着てたじゃん」

一「さらつと人の過去をばらすな!」

ス「一樹……趣味は人それぞれだから、私は何にも言わないよ」

一「人を女装癖の持主みたいに言うな!……うち、お姉ちゃんい  
るからさ、服は主にお下がりだったんだよ……」

ティ「メイド長も原因の一つね」

イギリスの実家にはメイド隊なるものがある。しかし、父さんの定  
めた採用条件がおかしすぎるせいで个性的すぎる人達が集まってし  
まった。そのうちの一人がメイド長で、よく服を作つては僕達にく  
れた。これだけ聞けばやさしくていい人なんだけど……持ってく  
る服が全部女物で、当然のように僕の方もあった。+お姉ちゃんが  
着れなくなったのがそのまま流れてくるので僕の服は2/3ほど女  
物だった。気付かれないようにちよつとずつティアにあげるのに、  
どれだけ苦労したことか。一週間仕事させて面白いやつを採用つて、  
メイドの意味を1260度位間違えてると思う。



シ「操作方法は、召喚獣に意識を集中するだけだから、ちょっとテイアナとかずきでやってみてよ」

ー「ん」

テイ「わかったわ」

数学

Fクラス 藤崎一樹

57点

VS

Fクラス ティアナ・ランスター

62点

テイ「結構絞ったのね」

ー「そつちもね」

Fクラスに入るために結構調整したから、僕もティアも本来よりかなり点が低い。

テイ「じゃ、いくわよ!」

ティアの召喚獣が僕の召喚獣に向けて銃を撃つ。何発か掠ったが直撃はない。

テイ「意外と当たらないわね」

数学

Fクラス 藤崎一樹 48点

VS

Fクラス ティアナ・ランスター 62点

「じゃあ今度は僕が行くよ！」

召喚獣に意識を集中して、前へと走らせる。拳を強く握って顔面めがけて殴ろうとしているが、格好が格好なのでとってもシールドだ。

「ていやっ！」

ティ「くっ…！」

ギリギリのところかわされ、何発か撃ち込まれる。

数学

Fクラス 藤崎一樹 14点

数学 VS

Fクラス ティアナ・ランスター 56点

ティ「少し掠ったか」

「こつちなんてモロヒットだよ。てか操作うまいね」

ティ「銃は集中力が命だから、集中なら得意よ」

某学園生活お助け部のリーダーを思い出したのは僕だけではないはず。

シ「そこまで！」

まだ決着が付いていないのに、シルフィが止めに入る。

ティ「まだ勝負はついてないわよ？」

シ「試召戦争で点数が0点になると補修になっちゃうからね。んで、今かずきの召喚獣調べてみたんだけど、武器わかったよ」

ー「本当！？よかった。素手じゃないんだ」

ホツと息を吐く。なんでもいいとはいえ、なれない召喚獣で素手はつらい。

ス「で、なんだったの？」

シ「これだよ」

そういつてカバンから何かを取り出す。

ー「デッキ？」

シ「そ。かずき、デュエルディスクセットして」

ー「Dゲイザーはいる？」

シ「大丈夫だよ。フィールドが同じような役割持つてるから」

ー「わかった。じゃあ、デュエルディスク、セット！」

普段はタブレットのようにも扱えるディスクが、僕の掛け声とともにカードゾーンが現れる。

シ「攻撃力が守備力より高いやつと、その逆のやつを召喚してみて」

ー「わかった。『ガスタの巫女ウインダ』と『ガスタ・イグル』を召喚！」

すると、僕の召喚獣が腕を前に出し、そこにまた別の魔法陣が現れデフォルメされたウインダとイグルが出てきた。

ー「おお！これが僕の武器か！」

素手だと思ってたぶん感動が大きい。

#### 数学

Fクラス ガスタの巫女ウインダ 100点

&

Fクラス ガスタ・ガルド 40点

ティ「数値が高い方の1/10が点数になるようね」

ウインダを動かしてみようと召喚獣と同じように意識を集中するけど、ぴくりとも動かない。

シ「召喚したモンスターはかずきの指示で動くから、別にモンスターに意識を集中しなくても大丈夫だよ」

「「そうなの？ティア、ためにやってみていい？」

ティ「いいわよ。きなさい！」

シ「じゃあフィールド変えるね」

「よし！イグルでティアの召喚獣を攻撃！」

僕の指示を聞き、イグルがティアに向って突進する。けど、ティアの召喚獣に易々と打ち抜かれ、破壊された。

「イグル！」

#### 物理

Fクラス	藤崎一樹	64点
Fクラス	ガスタの巫女ウインダ	100点
Fクラス	ガスタ・ガルド	0点
VS		
Fクラス	ティアナ・ランスター	49点

ティ「直線で突っ込んできたら弾丸の的よ！」

シ「でもイグルの効果は発動するよ」

「「これでも使えるんだ。じゃあ、もう一体ウインダを召喚！」

物理

Fクラス 藤崎一樹 64点

Fクラス ガスタの巫女ウイнда 100点

Fクラス ガスタの巫女ウイнда 100点

VS

Fクラス ティアナ・ランスタール 49点

—「こんどはウイндаで攻撃！」

ウイндаが風の魔法弾を放つ。

ティ「甘いわよ！」

ティアはそれをかわしつつ、的確に打ち込んできた。短時間で上手くなり過ぎだと思えます。

物理

Fクラス 藤崎一樹 64点

Fクラス ガスタの巫女ウイнда 0点

Fクラス ガスタの巫女ウイнда 0点

VS

Fクラス ティアナ・ランスタール 49点

—「次はガルドとイグル！」

物理

Fクラス 藤崎一樹 64点

Fクラス ガスタ・ガルド 50点  
Fクラス ガスタ・イグル 40点

VS

Fクラス ティアナ・ランスター 49点

ティ「……ねえ一樹、これキリがないような気がするんだけど」

一「そうだね。僕もそう思ったところだよ」

シルフィの口ぶりからすると、魔法と罫も使えるみたいだし、交信とかで戻せるからね。

ス「味方としてはかなり頼もしいけど、敵にしてみるとめんどくさそうだね」

シ「ガスタはデッキ フィールド 墓地のサイクルが完璧だからね」。むしろかずきのためって感じだよ。この武器」

ティ「他のデッキじゃそううまくはいかないわよね。ランスターが破壊されればそこに隙ができるし」

シ「うんうん。破壊されても出てくるってのはかなりでかいメリックだよ」

ティアとシルフィがガスタについて語りだした、その時……

ピンポンパンポン《連絡いたします》

この声は……須川？なぜ放送室に？てかなんで放送してんの？いま

は試召戦争中じゃ？

《船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています。生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

え、ええ〜〜……

シ「うわ〜、あきひさの奴、完全にはめられたね。船越先生っていえば婚期を逃して単位を盾に生徒に交際を迫る人だからね〜。ほんと女に生まれてよかったよ」

『須川あああああああつ！！』

どこからか犠牲者の叫び声が聞こえる。とりあえず黙祷を捧げておこう。

シ「んじゃ、次はスバルとかずきでお願い」

ス「わかった！」

一「またっすか？」

シ「武器が違ったからね。録り直しですよ」

一「ほーい」

こんな感じでダラダラと練習兼データ収集は進んでいった。

……あ、召喚戦争は姫路がとどめを刺して勝ったみたいだ。



## ガスタとスターズとそれぞれの武器（後書き）

こんにちは。アニメの布施先生が若すぎて、マジで誰だか分らなかつたガスタさんです。

……まあそんなどうでもいい話は置いて。

実はまだ明久のお相手さんが決まっていなくて、アンケートを取ってみることにしました。以下の中から1つ選んで一言をお願いします。

? 明久×美波

? 明久×優子

? 明久×スバル

? 明久×カナ

姫路はありきたりすぎるので候補に入れてません。ごめん姫路さん。秀吉は幼馴染設定なので、ちゃんと明久に男だと思われてます……ギリギリで。

遊戯王の道具設定はZEXALで行きます。シンクロとか普通にあるけど、KCがアニメZEXALを発表。それに伴いアニメモデル普及って感じです。なのでNO.はあるけど普通のカードです。まあいろんな世代のキャラが出ると思うけど。

幼少時代、ティアナは家族が兄しかいなかったんで、兄の就職先であるペガソ本部に住んでました。ペガソは一樹の実家も兼ね備えているので、昔も一緒に住んだということになります。

あと、Dクラス戦はカナが明久とずっと一緒に行動してたっただけで、概ね原作通りに滞りなく終了いたしました。

## 天才と天然と殺人料理（前書き）

アンケートの結果ですが、優子・カナ・スバルが同表だったので、僕も1票入れて、スバルになりました。まあカナにはチアキに人形をあげたあの方がいますしね。

## 天才と天然と殺人料理

（翌日）

一樹 side

明「うあー……づがれたー」

明久が机に突っ伏す。朝から4教科テストやってるし、船越先生と昨日の放送の件で一悶着あったらしい。

秀「うむ、疲れたのう」

夏「朝から4教科とか、死ぬって」

カナはぐでーっと寝転がっている。ムツツリーニが一生懸命覗こうとしてるけれど、止める気力もないみたいだ。

ティ「一樹はテストどうだった？」

ティアが僕に質問してくる。

一「まあまあかな？悪くはないって感じだね」

ティ「スバルは？」

ス「モチロン完璧だよ！200点は取れてる自信あるよ」

シ「200点ですね。わかります」

ス「ホントに私の成績信用してないね……」

ティ「昨日物理14点だった人の何を信用しろと言うのかしら？」

スバルが目をそらす。

雄「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

明「それは昼飯とは言わないと思うんだけど」

1日分の炭水化物の摂取量を明らかに超えている。

美「ん？吉井達は食堂行くの？だったら一緒にいい？」

雄「ああ、島田か。別に構わないぞ」

美「それじゃ、混ぜてもらおうね」

ム「……………（コクコク）」

美「吉井、なんかウチの悪口考えてない？」

明「滅相もございません」

多分色気がどうとか思ってたんだろう。

—「僕たちもいいかな？」

雄「もちろんOKだ」

瑞「あ、あの、皆さん……」

立ち上がり、学食に行こうとしたところで声をかけられた。

明「うん？あ、姫路さん。一緒に学食行く？」

瑞「あ、いえ。え、えっと……、その、私……皆さんのお弁当を作ってきたんですけど……」

明「え？」

秀「ワシらにかの？」

瑞「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

と、身体の後ろに隠していたバックを出してくる。

明「迷惑なもんか！ね、雄二！」

雄「ああ、そうだな。ありがたい」

瑞「そうですか？良かった〜」

ほにゃっと嬉しそうに笑う姫路。いい娘だなー。

美「むー……っ。瑞樹って、意外と積極的なのね……」

明久を親の敵のように睨んでる島田。なんで明久を睨むんだろ？

秀「それでは、せっかくのぐ馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋  
上でも行くかのう」

明「そうだね」

雄「そうか。それならお前らは先に行つててくれ」

明「ん？雄二はどこか行くの？」

雄「飲み物でも買つてくる。昨日頑張つてくれた礼も兼ねてな」

美「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

雄「悪いな。それじゃ頼む」

美「おっけー」

雄「きちんと俺達の方とつておけよ」

明「大丈夫だつてば。あまり遅いとわからないけどね」

雄「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行つてくる」

僕たちに釘を刺してから坂本と島田は教室を出て行つた。

一「僕たちも行こう」

明「そうだね」

ス「瑞樹、それ重いでしょ？私が持つよ」

瑞「そ、そんな！悪いですよ！」

ス「大丈夫大丈夫！私力強いんだから！」

瑞「あつ……！」

スバルが姫路の手から弁当の入ったバツクを取る。

そんなこんなで、僕たちは屋上についた。

秀「天气が良くて何よりじゃ」

瑞「そうですねー」

抜けるような青空。そのまま寝てしまいたいくらいいい天気だ。

瑞「あ、シートもあるんですよ」

姫路がバツクからビニールシートを取りだす。準備万端だね。

屋上には僕ら以外誰も居なくて貸し切り状態だ。

シ「気持ちいいねー」

ム「……………（コクリ）」



瑞「あの、あんまり自信ないんですけど……」

姫路が重箱の蓋を取る。

『おおっ！』

僕らは一斉に歓声を上げた。

海老フライとか唐揚げとか、弁当の定番メニューが重箱の中に詰まっている。

明「それじゃ、雄二には悪いけど、先に」

ム「……………（ヒョイ）」

夏「私も！（ヒョイ）」

明「あつ、ずるいぞ二人とも！」

ムツツリーニとカナが海老フライをつまみ取った。

そして、流れるように口に運び

ム・夏「……………（パク）」

バタン  
ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

明「ちよっ……………カナ！？大丈夫、しっかりして！」

『……………』

瑞「わわっ、カナちゃん、土屋君!？」

おかしい、見た目は普通なのになぜ二人とも倒れたんだ?何入ったんだ、これ?

ム「……………(ムクリ)」

あ、ムツツリーニが起き上った。

ム「……………(グッ)」

そして、姫路に向けて親指を立てる。

多分、おいしいって伝えたいんだろう。

瑞「あ、お口に合いましたか?良かったですっ」

ムツツリーニの言いたいことが伝わったのか、姫路さんが喜ぶ。

でもねムツツリーニ、君はなんでそんなに震えているんだい?僕にはK.O寸前のボクサーにしか見えないよ。

瑞「よかったらどんどん食べて下さいね」

姫路が笑顔で進めてくるけど、この瀕死寸前の二人を見てしまったら、悪魔の囁きにしか聞こえない。気づくんだ姫路。目の前にいる君の弁当を食べて、幼馴染に抱えられて死んでるような顔をしてい

る少女を。

ス（ねえ、あれどう思う？）

スバルが姫路さんに聞こえないように小さな声で話しかけてきた。

秀（……どう考えても演技には見えん）

ー（だよな。かなりやばいでしょ、あれ）

明久が必死でカナにお茶を飲ませてるけど、復活する気配はない。  
ムツツリーニも自分のお茶を飲んでるけど、全身が震えてるせいで、  
ほとんど口に入ってるない。

雄「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

ここで坂本登場。

ー「あつ、ストップ坂本！」

坂本が素手で卵焼きを口に運ぶ。

雄「なんだ藤崎、卵焼きならまだあるからそつちを」

僕の静止を聞かず、そのまま口に放り込み

パク バタン ガシャガシャン、ガタガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

美「さ、坂本！？ちよつと、どうしたの!？」

遅れてやってきた島田が坂本に駆け寄る。

坂本は僕たちの方をじっと見て、目でこつ訴えてきた。

『毒を盛つたな』と。

僕たちは一斉に首を横に振る。

付き合いは短いが、この状況で出てくる言葉はそれくらいしかないだろうから僕たちはすぐにわかった。

雄「あ、足が……攣つてな……」

姫路が傷つかないように嘘をつく坂本。けつこついいやつなのかもしれない。

ス「あはは、ダツシュで階段の昇り降りしたからじゃないかな？」

秀「うむ、そうじゃな」

シ「急がば回れって言うんだから、いくらみずきの弁当を早く食べたいからって焦っちゃダメだようじ」

雄「ああ、まっだくだな」

やばい、坂本も虫の息だ。

美「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

何も知らない島田が不思議そうな顔をする。余計なことを言わないうちに退場させないと。

シ「あ、みなみ、その手のあたりにさっきまで虫の死骸があったよ」

美「ええっ！？早く言ってよ！」

シ「ごめんね」。とりあえず洗ってきた方がいいんじゃないかな？」

美「そうね。ちょっと行ってくる」

席を立つ島田。ナイスシルフィ！これでリスクが減った。

秀（一樹頼む！）

一（いや無理だって！僕が食べたら確実に死ぬ！）

ス（やっぱり、ホントのことを言った方がいいんじゃないかな？）

秀（せっかく作ってきたのじゃから、その気持ちは無碍にはできないだろう。じゃから頼む、一樹！）

一（そこまで言ったなら自分で食べよ！）

ス（……私が行くよ）

テイ（スバル！？）

ス（皆がダメでも、私ならいけるかもしれない）

そうか、スバルは戦闘機人だから、普通の人間と体の構造が違う。

ティ（だからって、危険よ！）

ス（それでも、誰かがやらなくちゃいけないんだから）

ティ（スバル……）

やばい、かつこよすぎる。スバルが勇者に見えてきた。

シ「みずき、私も作ってみたいから、レシピ教えてくれない？」

シルフィが姫路に問いかける。よし！これで何が入ってるか分かるぞ。

瑞「はい、自分なりにアレンジしてみたんですけど……」

シ「へえ、アレンジか、それで何を入れたの？」

瑞「えつと、すこし酸味が足りなかったので濃塩酸と濃硝酸を入れてみました」

おかしい、なんかもう色々とおかしい。海老フライも卵焼きも酸味なんていらぬはず。それ以前に濃硫酸も濃硝酸も料理に使うものじゃない。

シ「へ、へえ〜。ちなみに量はどれくらい？」

流石のシルフィも頬がひつついてる。

瑞「確か…濃塩酸が30gで、濃硝酸が10gです」

—（えっと、それって……）

化学は全くできないけど、どこかで聞いたことある組み合わせだな  
と思い、脳の中を探ってみる。

シ（王水だね）

シルフィの言葉を聞いたとたん、僕とティアナはスバルから弁当を  
ひったくる。幸いまだ口は付けていないようだ。

ス「えっ、ちょっと……」

ティ「だめ！王水は金でも溶かすのよ。アンタでも無理よ！」

—「姫路。王水の特徴について教えてほしいんだけど」

瑞「王水ですか？えっと、酸化力が非常に強くて、通常の酸には溶  
けない金や白金などの貴金属も溶解できる液体ですよね」

—「何と何をどの比率で混ぜたら出来るの？」

瑞「濃塩酸と濃硝酸とを3：1の体積比で混ぜればできますよ」

—「……………」

どうやらこの天才さんは天然らしい、無自覚で人を殺そうとしていたなんて恐れ入る。

一「とりあえず、カナのお姉ちゃんが料理の天才だから、電話しとくから教わるといいよ」

瑞「え？はい」

僕たちは話をうやむやにすることで、弁当を逃れることに成功。明久は一向に目を覚まさないカナを保健室に連れて行き、僕たちはそのまま作戦会議に移った。



## 天才と天然と殺人料理（後書き）

戦闘機人が話に出たので、ちょっと調べてみたんですけど。

google先生で検索

へえ〜『Nanoha Wiki』なんてあるんだ。と思いつつ、サイトを開く

スバル・ナカジマのページを読む

『首席卒業となっているなど、能天気な性格とは裏腹に頭はいい。』

(。。。)

(っ)ゴシゴシ

(;。。)

(っ)ゴシゴシ

(;。。) ::!?

マジっすか!?!知らなかった……見事に性格に騙されました。

まあでも、やっちゃったもんは仕方ないので、このまま行きます。

## ガスタとBクラスと試召戦争（前書き）

少し前……戦慄の昼休みを終え教室に戻る頃。

シ「あきひさ、アレの調整やるから今日は不参加ね」

明「あ、そっか。しばらく使っていないからね」

というわけで、シルフィの発明品の調整のため、明久は不参加です。

今回の話にはオリカが1枚出てきます。ぶっ壊れ効果ではないです。これからたまにオリカが出てくるかもしれません。

## ガスタとBクラスと試召戦争

一樹 side

F「いたぞ、Bクラスだ！」

F「高橋先生を連れてくるぞ！」

F「生かして帰すなーっ！」

物騒な台詞が皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

総合

Bクラス 野中長男 1943点

VS

Fクラス 近藤吉宗 764点

数学

Bクラス 金田一裕子 159点

数学 VS

Fクラス 武藤啓太 69点

物理

Bクラス 里井真由子 152点

Fクラス                      君島博                      VS                      77点

どうやら生きて帰れないのは彼らの方だったようだ。……まあ、分かってはいたけど、戦力は減らすわけにはいかないか。

—「島田は武藤を、ティアは君島を助けてあげて！僕は近藤を助ける！試獣<sup>サモン</sup>召喚！」

ティ・美「了解！試獣<sup>サモン</sup>召喚！」

### 数学

Bクラス                      金田一裕子                      156点  
VS  
Fクラス                      島田美波                      172点

裕「172点！？私より高い……！」

美「数学は日本語を読まなくてもできるからね」

美波の召喚獣が相手の召喚獣を一刀両断にする。

### 数学

Bクラス                      金田一裕子                      0点  
VS  
Fクラス                      島田美波                      172点

美「よし！」

物理

Bクラス 里井真由子

152点

VS

Fクラス ティアナ・ランスター

240点

真「240って…何でそんなのがFクラスにいるのよ!？」

ティ「さあ？何でかしらね？」

相手がひるんでいる隙にティアが弾丸を撃ち込む。すげー見事にヘッドショットだ。

物理

Bクラス 里井真由子

0点

VS

Fクラス ティアナ・ランスター

240点

ティ「相手になんないわね」

ティアも余裕の勝利だ。

「さて、僕もやんなきゃね」

総合

Bクラス	野中長男	1943点
	V S	
Fクラス	藤崎一樹	2918点

長「はあ！？なんだその点数は！？」

B「だが装備は貧弱、武器も無しだ。楽勝だろ？」

ー「う、うるさい！好きでこんな格好してんじゃないんだから！」

長「ああ、点数には驚いたが、俺達の敵じゃねえな」

ー「人の話を聞け！……もういい、やってやる！デュエルディスク、セット！」

『え？』

その場にいた全員が何故？と言いたそうな顔をしてる。

ー「これが僕の武器だ！来い、ウインダ！」

僕の召喚獣の前からウインダが現れる。

長「モンスターを召喚した！？」

総合

Bクラス 野中長男 1943点

VS

Fクラス 藤崎一樹 2918点

Fクラス ガスタの巫女ウィンダ 1000点

どうやら総合科目だと、1/10にならないようだ。当り前のよう  
に思えるけど、ちょっと安心。

ー「ウィンダ！あいつをぶっ飛ばせ！」

昨日訓練で知ったが、攻撃の仕方とかも指示できるみたいだ。デュ  
エルモンスターズというより、ポケモンだな。

ウィンダが野中の召喚獣に杖で殴りかかる。

長「ちつ……！」

野中の召喚獣はウィンダの攻撃を剣で受け止める、けど、ウィンダ  
の攻撃はこれだけじゃない。

ー「今だ！ブラストシューター！」

ウィンダの足もとに五角形の魔法陣が広がる。これはミッドでもベ  
ルカでもなければ、当然キャロの使う召喚術式でもない。デュエル  
モンスターズの世界の住人だけが持っている魔術式、精霊魔法だ。

そこから風が吹き荒れ、ウィンダの周りにいくつかの風の鎌が現れ  
る。ウィンダと野中の召喚獣では力差がかなりあるので、一撃では

決められない。それなら数で攻めるまでだ。

ー「シユート！」

鏝が野中の召喚獣めがけて降りかかる。

長「なっ！？ギヤアアー！」

全部の鏝が綺麗に突き刺さる。

総合

Bクラス 野中長男

0点

V S

Fクラス 藤崎一樹

2918点

Fクラス ガスタの巫女ウィンダ

1000点

ー「あっさりやられちゃってるけど、敵じゃないんじゃないかなかったっけ？」

長「くそっ……！」

鉄「戦死者は補習ううう！」

長「げっ…鉄人！？」

どこからか西村先生が出てきた。あれだけデカイのに、どこにいたんだろ？



長「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」  
鉄「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わるころには趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立てあげてやるわ」

長「お、鬼だ！誰か、助けっ　イヤァァ　（ボタン、ガチャ）」

周りを見渡すが、先に負けた二人はもういない。既に連れてかれた後みたいだ。

ー「シルフィから色々聞いてはいたけど、百聞は一見に如かずとはこのことだね」

ティ「これは……絶対に負けられないわね」

負けたら地獄行きだ。何としても生きなければ。

瑞「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

息切れした姫路が遅れてやってきた。全力疾走についてこれなかったか

B「来たぞ！姫路瑞樹だ！」

Bクラスの誰かが叫ぶ。Dクラス戦で使ったらしいから、知られて当然か。

ティ「姫路、来たばかりで悪いけど、頼んでいいかしら？」

瑞「は、はい。行って、きます」

そのままトタトタと戦場に紛れ込む姫路。なんだろう、ハムスターを見ている時みたいになごむ気がする。

岩「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路さんに数学勝負を申し込みます！」

瑞「あ、長谷川先生。姫路瑞樹です。よろしくお願いします」

やっぱり向こうにとって姫路は早く潰しておきたい相手なんだろうな。

菊「律子、私も手伝う！」

もう一人のBクラス女子が召喚を開始した。相手は10人位しか来てないのに姫路一人に二人がかりなんて、よっぽど警戒してるんだな。

『<sup>サモン</sup>試獣召喚！』

三人が召喚ワードを口にして、魔法陣が展開。おなじみの召喚獣が顔を出す。

敵二体は剣と槍、姫路の方は召喚獣より一回りも大きい大剣を軽々と持ち上げている。

—「ん？召喚獣の左手首についで腕輪ってなんなの？」

姫路の召喚獣には赤というより、DSのクリムゾンレッドに近い色をした腕輪が付いていた。正直装備とミスマッチな色だと思うんだ

けど、姫路も赤とかそういうイメージないし。

瑞「あ、はい。数学は結構とけたので……」

テストの成績が良いと腕輪が付くのか。高得点者を見分けるためかな？でも点数も表示されるからあんま意味ないような……

岩「そ、それって!？」

菊「私たちが勝てるわけないじゃない!」

たかが腕輪で何騒いでんだあっちは？

美「テストで一定以上の点を取ると特殊能力が使えるようになる腕輪が装備されるのよ。あの色はたしか砲撃系ね」

なるほど。それであっちの二人は焦ってんのか。しかし、砲撃系ね

……

ー「ティア、やることは分かってるね？」

ティ「やっぱり同じ考えみたいね。ちゃんと守りなさいよ？」

ー「当然!」

二人で軽くやり取りをすると僕とティアはBクラス生徒の間を縫って後ろに回り込む。姫路に気を取られているせいかな、簡単に進むことができた。砲撃系と言われたら……ね。

ー「Fクラス藤崎一樹」

ティ「Fクラスティアナ・ランスター」

一・ティ「ここにいるBクラス全員に勝負を挑む！試獣<sup>サモン</sup>召喚！」

敵は全員巻き込まないとね！

B「し、しまった！囲まれた！」

挑まれた勝負は必ず受けなくてはならない。これでここにいるBクラスは姫路の能力から逃げられなくなった。

瑞「え？ふ、二人とも、そこにいたら当たっちゃいます！」

美「そうよ！何やってんのよ！藤崎、ティアナ！」

ティ「大丈夫よ。一樹がちゃんとガードするから」

一「そーそー。ティアも含めて僕がきっちり守るから、遠慮なくやつちやって！」

瑞「でも……」

一「仲間を信じろつて。絶対1点も減らさないから」

瑞「……わかりました。行きます！」

### 数学

Fクラス 姫路瑞樹 462点

Fクラス 藤崎一樹 286点

Fクラス	ティアナ・ランスター	291点
VS		
Bクラス	岩下律子	189点
Bクラス	菊入真由美	151点
Bクラス	他8名	平均160点

姫路が手をキュツと握り込む。その動きに合わせて姫路の召喚獣が左手をこちらに向ける。

菊「律子！とにかく避けないと！」

岩「避けるって、いったい何所に!？」

菊「とりあえず横！」

Bクラスの召喚獣共が大げさなくらいに横に跳ぶ。その辺のアシストは完璧だから意味ないのね。

キュボツ！

左手から光線がほとばしる。正面から見ると結構眩しい。

ー「<sup>トラップ</sup>罠カード、聖なるバリア・ミラーフォース！あとクレボンスを召喚&効果発動！」

ミラフォが僕とティアアの召喚獣を包み込む。そして姫路の光線が当たって乱反射を起こす。すると、姫路が打ち漏らした壁際の敵に見事にヒットした。ちなみに姫路はクレボンスの効果でしっかりガード。でも一回の防御に80点も使うのは辛い。あんま多用できない

ね。

「だって、1点も減らさないって言ったときながら80点も減らしてしまっただ！」

ティ「しょうがないわよ。姫路を守るためなんだから」

### 数学

Fクラス	姫路瑞樹	4	1	2	点
Fクラス	藤崎一樹	2	0	6	点
Fクラス	ティアナ・ランスター	2	9	1	点
VS					
Bクラス	岩下律子	0	0	0	点
Bクラス	菊入真由美	0	0	0	点
Bクラス	他8名	0	0	0	点

B「なん……だと……っ!？」

岩「そんな……嘘でしょ!？」

「よし、相手の前衛は全滅だ!皆、突き進め!」

『おおーーーーっ!』

Bクラスの連中は灰にでもなったかのように真っ白だったが、こっちの連中は炎のように燃え盛っていた。

秀「一樹、ワシらは教室に戻るぞ」

—「え？なんで？」

戻る？本陣でなにかあったのかな？カナもいるし大丈夫だと思ったんだけど。

秀「ちょっと嫌な予感がしての。Bクラスの代表が根本らしいんじゃない」

—「根本？誰それ？」

美「『球技大会で相手チームに一服盛った』とか『喧嘩に刃物はデフォ』とか『カンニング上等』とか、黒い噂しかない人間よ」

へえ、そんな奴がいるのか。

—「じゃあ、ティアと姫路はこいつらの指揮をお願い」

ティ「了解！」

瑞「わ、分かりましたっ！」

ティアと姫路に後を任せ、僕と秀吉は教室に戻った。

Fクラス

—「うわ、なんだこれ」

秀「まさかこつくるとはのう」

一「卑怯というより、器物破損だぞこれ。立派な犯罪だ」

教室に向かった僕らを迎えたのは穴だらけになった卓袱台とヘシ折られたシャーペンや消しゴムだった。

一「これじゃ補給ができないな」

秀「一樹よ、お主の力で元に戻せんかのう？」

一「生憎だけど、物を治すは魔法は持ってないんだ」

ユ一ノあたりなら使える気がするけど。

雄「大丈夫だ。別にこのままでも作戦に大きな支障はない。」

突然後ろから声をかけられる。

一「坂本、どうして教室がこんなになってるのに気がつかなかった？」

坂本はずっと教室にいたはず。それなのに気付かないのはおかしい。

雄「協定を結びたいという申し出があつてな。調印のために教室を開けてたんだ」

一「教室には1人も残さなかったのか？」

雄「いや、5人配置したが、どうやらやられたらしいな」



「だとすると、犯人は少なくとも3人か。これは完全に向こうの代表の仕業だな」

雄「ああ、点数差があるとはいえ、1人で5人を相手にできるとは考えにくいからな」

「なら、これが終わったら向こうの代表に弁償させるか」

常にポケットに入れていた予備のシャーペンを使って、生徒手帳のメモ欄に壊されたものをメモする。

秀「雄二よ協定とはなんじゃ？」

雄「ああ、4時までには決着がつかなかったら戦況をそのままに続きは明日の午前9時に持ち越し。その間は召喚戦争にかかわる一切の行為を禁止する。ってな」

「で、それ承諾したの？」

雄「そうだ」

なるほど。姫路に無理させるわけにはいかないもんな。

でも、姫路が万全の状態だと向こうにとっては不利なはず。わざわざ設備を壊すためだけに自分のクラスを追い込むことはしないだろうし、だとすると、向こうにも何か策があるのか……

秀「一樹よ、とりあえずワシは前線に戻るぞい。向こうでも何かさ  
れているかもしれん」

そういうと、秀吉は教室を駆け足で出て行った。

「さて、とりあえずシルフィに値段調べてもらって、110番を盾に倍額位請求しようかな。」

雄「えげつないなお前」

「人生と比べたら相当軽いと思うけど。所詮Fクラスのボロ設備だし」

雄「それもそうだな。んじゃ、職員室からシャープペンと消しゴム借りてくる」

「了解。僕も前線に戻るよ」

僕らは教室を出て、それぞれの目的地の向かった。

### 新校舎廊下

「またせたね！戦況は？」

亮「かなりマズイことになっている」

あれ、須川？指揮はティアと姫路がとってるはずなのに？

「どついでにいつと？」

亮「ランスターが捕まった」

—「えっ、ティアが!?!」

亮「はじめに島田が人質に取られて、それを助けようとしたところをやられたんだ」

今度は人質か! あいつらめ、ホントに手段を選ばない気だな!

—「とりあえず、状況が見たい」

こういうときこそ落ち着いて対処しないと。一回深呼吸をする。

亮「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

—「わかった」

須川が前を歩き、僕が後ろに続く。

人垣を抜けると、須川の言うとおり、二人のBクラス生徒にとらわれた島田とティアがいた。

—「ティア、島田!」

美「ふ、藤崎!」

ティ「一樹! ごめん、失敗した!」

B「そこで止まれ! それ以上近づくな! この女共にとどめを刺して補習室送りにしてやるぞ!」

島田をとらえているBクラスの生徒の一人が牽制をしてくるけど、そんなのは聞いていない。

— (ティア、隙を作るから、島田を助けられる?)

ティアに念話を送る。

ティ(わからない。けどやってみるわ)

— (よし。頼んだよ)

ティ(了解)

念話を終了して、敵と向き合う。

— 「二人の代わりに僕が補修室に行く。だから二人を解放しろ！」

B「そうか、なら召喚獣をだせ」

— 「先に二人を解放しろ」

B「断る、お前が補習室に行ったら解放してやる」

やっぱり出すしかないか。

— 「……………サモン試獣召喚」

僕の声で召喚獣が現れる。

B「やれ！」

英語W -

Fクラス

藤崎一樹

369点

VS

Bクラス

5人

平均120点

Bクラス

会津健太

118点

ちなみに、最初の勝負からデュエルディスクは付けたままで。そして、奇襲用としてあらかじめセットしてある

ー「反転召喚！ガスタ・ガルド！速効魔法、ショットバードアタック発動！自分の鳥獣族モンスターと相手召喚獣1体に鳥獣族の点数分ダメージを与える！対象は会津の召喚獣だ！」

会「何っ!?!」

英語W

Fクラス

藤崎一樹

369点

Fクラス

ガスタ・ガルド

0点

VS

Bクラス

会津健太

68点

ガルドの突撃をくらい、会津の召喚獣がよろける。

ティ「ありがとうっ！」

解放されたティアの召喚獣が素早く銃を抜き、会津と島田を捕えて  
いる2人の召喚獣を撃つ。

英語 W

Fクラス

ティアナ・ランスタ

396点

VS

Bクラス

会津健太

0点

Bクラス

鈴木次郎

0点

Bクラス

吉田卓夫

0点

一瞬で勝負がつき、島田も無事解放された。

美「ありがとうティアナ。藤崎」

ティ「どういたしまして」

B「くたばれっ！」

1人はいるよね。こっぴうKYなやつ。

一「お前らがな」

英語 W

Fクラス

藤崎一樹

369点

Fクラス

ガスタの巫女ウイ ندا

100点

VS

Bクラス 5人

平均120点

ショットバードアタックは、相手と自分のモンスターが破壊されるタイミングが同じだから、ガルドの効果が使える。ガスタだとゴツドの方より便利だったりする。

「スプレッドスラッシュ！」

ウィンダが集めた風が全方位に飛び散る。至近距離にいたKY共がよけられるはずもなく、切り裂かれた。

英語W

Fクラス 藤崎一樹 369点

Fクラス ガスタの巫女ウィンダ 100点

VS

Bクラス 5人 0点

一瞬でけりがつき、やられた奴らは補習室へと連れてかれた。

ピンポンパンポーンへえー、2年Bクラス対2年Fクラスの試召戦争は協定に基づき、戦況をそのままにして明日の9時に持ち越します。なお、明日の開戦まで、試召戦争にかかわる一切の行為を禁じます」

お、もう4時か。

「皆聞いたね。今日はここまでで終了。教室に戻るよ」

さて、秀吉とスバルはBクラスを追いこめたかな………

そんなことを考えつつ、僕たちは教室に戻った。



## ガスタとBクラスと試召戦争（後書き）

オリカ説明

シヨットバードアタック

速効魔法

自分フィールドの鳥獣族モンスター1体と、相手フィールド上のモンスター1体を破壊する。

見ての通りゴッドバードアタックの劣化です。でも、速効魔法なので5分5分かもしれないですね。

ガスタのリクルーターは、ほとんど「特殊召喚することができる」なので、ゴッドバードアタックのように、1ステップはさむと、タイミングを逃してしまい効果を使うことができません。なのでそういったモンスターにもってこいのカードなんです。

試召戦争中の「」を破壊する「」って効果は、一定のダメージを与えるって効果になります。先ほどのシヨットバードアタックなら、鳥獣族の能力分、奈落とか下限が決まっているカードはその数値分です。総合以外は1/10ですが。

## ガスタとCクラスと不可侵条約（前書き）

化学

ベンゼンの化学式について答えなさい

姫路瑞樹、シルフィ・マテリアの答え

C6H6

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

ベン+ゼン=ベンゼン

教師のコメント

君は科学をなめてまいせんか。

吉井明久、南夏奈の答え

B - E - N - Z - E - N

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室にくるよつに。

藤崎一樹、スバル・ナカジマの答え

分かりません！（ミッド語）

教師のコメント  
できれば地球上の言葉で。

## ガスタとCクラスと不可侵条約

一樹side

雄「ん？Cクラスの様子がおかしいだろ？」

ム「……………（コクリ）」

教室に戻ると、ムツツリーニが雄二に耳打ちをしていた。

雄「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

戦争の勝者を相手に戦うつもりなのだろう。疲弊してる所を狙ってくるなんて姑息な奴だ。

一「坂本、どうすんの？」

雄「んー、そうだな」

時計を見るとまだ4時半だった。そんなに遅い時間じゃない。

雄「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるぞ、とか言ってる脅してやれば俺達に攻め込む気もなくなるだろ」

テイ「そもそも、向こうは私たちが勝つなんて思ってないわよ」

確かに。これなら協定も結びやすそう。

雄「よし、それじゃ今から行ってくるか。秀吉は念のためここに残ってくれ」

秀「ん？なんじゃ？ワシはいかなくて良いのか？」

雄「お前の顔を見せると、万が一の場合にやるうとしている作戦に支障があるんでな」

優子に化けさせて挑発でもする気かな？でもそれやると秀吉の関節が増えることになるかもしれないけど、万が一なら別に大丈夫か。

秀「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

素直に引き下がる秀吉。万が一のことがないように祈っておこう。

一「あ、そつだ。根本が映ってる写真ってある？倒す相手がかんないのは結構不便なんだけど」

雄「そつか。お前は去年全く居なかったからな。ムツツリーニ、あるか？」

ム「……………男の写真なんて興味ない」

ですよねー。ムツツリーニが男の写真を撮りだしたら、それは天変地異の前触れだ。

明「ただいまー」

シ「戻ったよー」

教室のドアをガラツと開けて、明久とシルフィが入ってきた。

「丁度いい所に。シルフィ、このデータベースから根本のデータ見せて」

シ「根本？ああ、あいつね。ちょっと待って」

そういうと、シルフィはパソコンを開き、USBからプログラムを起動させる。

瑞「あの、何をしているんですか？」

シ「ハッキングだよ」

雄「堂々と犯罪宣言するな」

シ「ハッキングに善悪の意味合いは無いよ。悪いことに使うことはクラッキングって言うんだよ」

ティ「今やってるのがまさにクラッキングね」

ス「それって大丈夫なの？法律とか」

「日本では不正アクセス禁止法に引っかかるね」

ス「わかっててやらせるんだ……………」

「シルフィは侵入した痕跡を全く残さないから大丈夫だよ」

ス「いや、そうゆう意味じゃなくて……………」

シ「でたよ。はい」

言い合っている間に終わったようだ。パソコンを僕たちに向ける。なるほど、こいつが根本か。

一「ありがとう。もういいよ」

シ「ほい」

間の抜けた返事をしながらパソコンを元の位置に戻す。

雄「もういいか？んじゃ、行くぞ」

あまり大人数で行っても意味ないので、秀吉、と女性陣を残して、僕、明久、坂本、ムツツリーニというメンバーでCクラスに向かった。

Cクラス

雄「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開くなり、坂本がそこにいる全員に告げる。

Cクラスには、かなりの人数が残って……あれ？なんか多すぎる気がする。一クラス人数ってどのクラスも50人だったはずなのに、60人は居る。

小「私だけど、何か用かしら？」

雄「Fクラス代表として「待って」……なんだ藤崎」

坂本の言葉を途中で止める。

—「いるんでしょ。出てきなよBクラス」

雄「なに？」

明「何言ってるのー樹。ここはCクラスだよ。Bクラスの奴がいるわけないじゃないか」

—「よく見て。ークラスの人数って50人のはずなのに60人は居る」

僕の言葉に、皆は教室を見渡す。

明「いわれてみれば……」

ム「……全部で63人」

わざわざムツツリーニが数えてくれた。

小「あら、今は放課後よ。友達が来ててもおかしくないんじゃないかしら？」

—「それがホームルーム10分後位ならね。帰るまで1時間も待つ人は10人もいないと思うけど」



僕の反論にCクラスの代表が言葉を詰まらせる。どうもこの人は嘘をつくのが苦手らしい。感情で動くタイプだな。

小「で、でも、Bクラスとは限らないわよ。この学年には6つもクラスがあるんだから」

ー「Dクラスは昨日倒した。Aクラスは自分の教室にあれだけ良い設備があるんだから、友達を待つにしても教室で勉強でもしてると思うよ。Eクラスは……よく知らないけど、そもそも言葉に詰まる地点で肯定しているようなものだからね」

小「なら、Eクラスの人だったらどうするのよ?」

小学生みたいな反論が来た。面倒だから実力行使でいくか。

ー「なら、調べてあげようか?」

僕の髪と目が翠に染まる。

小「……………え?」

突然色が変わったことに、Cクラスだけでなく、坂本と島田とムツツリー二も驚いている。

ー「風よ、我が探せし者の居場所を示せ」

呪文と共に風が吹き出す。次第に一か所に集まって行き、止まった。この魔法は1度でも相手の顔を見てないといけないから。さっきシルフィに見せてもらったのがこんな形で役に立つとはね。

「そこだね。出てこないとぶつけるよ。空間がねじ曲がって見えるほどに固まった空気だ。当たったらさぞかし痛いだろうね」

明「痛い所の問題じゃすまないと思うんだけど」

明久が何か言っているが聞かなかったことにする。

根「ちっ……………」

舌打ちをしながら根本が立ち上がる。

「なんでこんな所にいるのか、説明してくれるよね？」

優しく問いかけるけど、頭上の空気は消してない。

根「フン！俺と友香は付き合ってるんだ！別に問題ないだろ」

「へえ……………その友香ってのは君？」

小「え、ええ」

予想とはかなり違う回答が返ってきたけど、これは使えるな。

「文面は……………よし、これでいいか」

送信ボタンを押すと、送信が完了したことを知らせる iPhone 独特のフワンという音がした。

「じゃ、皆、教室に戻る」

雄「そうだな（根本がいるんじゃない、協定は結べないだろうしな）」

明「……………（コクリ）」

教室を出るついでに魔法を解いた。ちょっとずつ周りに馴染ませるように解いていけば昨日のDクラスの生徒みたいにはならないけど、面倒だからそのまま解いた。結果は……………言わなくても分かるよね。

明「ところでさ、さっき誰にメールしてたの？」

—「ああ、はい」

明久に文面を見せる。

From: 須川

本文：根本ってCクラス代表と付き合ってるらしいよ

ここはこれから公開処刑の場になるだろうね。

—「そういえばCクラス代表の苗字ってなんて言っただろ？」

聞いてなかったな。皆代表って言ってたし。

明「たしか………小山さんじゃなかったかな？バレー部のホープの」

—「記憶しておっじ」

明「それ、なんてアストラル？」

—「ホープって聞いてなんかやりたくなかった」

## ガスタとCクラスと不可侵条約（後書き）

今回は少し短めです。

決して永夜抄のノーマルがクリアできなくて、ムキになって頑張っていたら、時間が無くなった訳ではないですよ。……………ホントですよ！

……………ウズンザびびりしててもコンテニューしちゃつたですよね  
I

## バカとガスタと卑怯者（前書き）

一樹のデバイスの名前とペガソの正式名称を変えました。

デバイスは『フライハイト』

ペガソは『時空管理局犯罪取締課第97管理外世界支部』

となりました。ペガソはぶっちゃけ長くなっただけで、基本ペガソって呼ぶんであんまり問題はありません。

デバイスと一樹の能力についてはあとがきにて。

## バカとガスタと卑怯者

明久 side

雄「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、登校した僕らに雄二は開口一番にそう告げた。

明「作戦？でも、開戦時刻はまだまだだよ？」

今の時刻は午前8時半。開戦予定時刻は9時だ。

雄「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

明「あ、なるほど。それで何すんの？」

雄「秀吉にこれを着てもらおう」

そういつて雄二が鞆から出したのはうちの学校の制服。

赤と黒を基調としたブレザータイプで、他校にもオトナのオトモダチにもかなり人気がある垂涎の一品だ。

……ところで雄二、それをどうやって手に入れたの？君に何があったんだい？

秀「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするのじゃ？」

雄「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらう  
なるほど。それが狙いか。」

明「つて、それはまずいよ雄」

雄「ん？なぜだ？」

明「もし優子にばれたら、秀吉の関節が増えることになっちゃう」

優子は秀吉の姉で学校では優等生を演じてる。しかし家ではかなりズボラで、下着でうろつくわB.L同人誌を読み漁るわの隠れ腐女子だ。んで、そのことがばれそうになると容赦なく間接技をキメてくる。今までに何度やられたことが。

美「ねえ吉井、何で木下さんのこと呼び捨てなのかな？」

明「え？なんでつて幼馴染『総員狙ええ！』だからあつ！？危な  
つ！誰、今カッター投げた（ブン！）のおお！？島田さん！？どさ  
くさに紛れて殴ろうとしないでっ！」

こいつら、本気であてにきやがった。

ス「おっと」

しまった！後ろにスバルがいたのか！

明「ごめんスバル！ケガはない？」



ス「うん。シールド張ったから大丈夫だよ」

そっか。スバルも魔導師なのか。っと、考えている間に第2波が来た！

明「くっ、しょうがない！正当防衛だっ！」

僕はボックスを開け、涙鳥を出す……ところでカッターがすべて地面に落ちた。

「危ないだろ、そんなもん投げちゃ。島田も一回落ち着けて」

一樹が魔法で全部撃ち落とすようだ。

雄「そっだぞお前ら。明久の処分なんていつでもできんだから後にしろ」

明「今すぐに君を処分したいんだけど」

テイ「後にしなさい。この作戦は開戦までにはやらないといけないんだから」

秀「そっじゃぞ明久。それにワシは大丈夫じゃ」

明「秀吉、でもこの作戦を実行したら関節が増えることになっちゃうよー！」

シ「だいじょーぶだよ。私がどんな手を使ってでもひでよしを守るから」

秀「男としては複雑じゃが、こう言っておるのじゃから安心じゃろう」

どんな手でもってところに引っかかるけど、確かにこれなら安心だね。

シ「そーそー。泥舟に乗ったつもりでいなさいって！」

雄「それじゃ沈むぞ」

……すつごく不安になった。さっきまでの安心はどこに行ったのだろう。

夏「バカだなあ、そこは黒船だろ」

ー「大船だよ。スケールは変わらないだろうけど」

雄「バカはほつといて、頼むぞ。秀吉」

秀「うむ。了解じゃ」

そついうと、秀吉はその場で生着替えを始めた。

ム「……………！！（パシャパシャパシャパシャ）」

ムツリーニは指が擦り切れるんじゃないかというくらいにすごい速さでシャッターを切っている。そのほかにも、鼻血を出したり、挿んだりしている奴がちらほら。

ス「なんでだろうね……男の着替えを見たはずなのに、ちっとも嫌

な気がしないよ」

ティ「エリオ達が女だと思うのも無理ないわね」

ー「ティアもその一人だったけどね」

夏「なるほど、いつの間にか秀吉は異世界も認める男の娘になっていたのか」

秀「ん？お主らどうしたのじゃ？」

雄「さあな？俺にもよくわからん」

秀「おかしな連中じゃのう」

おかしいのは秀吉の外見だと思う。

雄「んじゃ、Cクラス行くぞ」

秀「うむ」

雄「が秀吉を連れて教室を出ていく。」

明「あ、僕も行くよ」

そのあとを慌てて追いかける。

Cクラス前

ガラガラガラと秀吉がCクラスの扉を開ける音が聞こえてくる。僕と雄二は少し離れた所から見守っている。

秀『静かにしなさい、この薄汚い豚ども!』

…… やってしまった。

雄『流石だな、秀吉』

明『これ以上はない挑発だけど……大丈夫かなあ』

この後のことを考えるととっても気が重くなる。

雄『シルフィを守るつつつてんだ。大丈夫だろ』

明『そうだけどさあ……』

小『な、何よアンタ!』

この声は……確か小山さんだ。顔を見なくても怒っているのが伝わってくる。

秀『話しかけないで!豚臭いわ!』

自分から来ておいてそれはないでしょ……

小『アンタAクラスの木下ね?ちょっと点数がいいからっていい気になってるんじゃないわよ!何の用よ!』

秀『私はねこんな臭くて醜い教室が同じ校舎にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で十分だわ！』

小『なっ！私たちにはFクラスがお似合いですって！？』

流石にFクラスもそこまで酷くない。

秀『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に貴女達を相応しい教室に送ってあげようと思うの』

演劇部ってここまでやれないとダメなのかな？それともこの学校が異常なのかな。

秀『丁度試召戦争の準備をしているようだし、近いうちに私たちが薄汚い貴女達を始末するから。覚悟しておきなさい！』

そう言い残し、秀吉は教室から出てきた。

秀『これでいいかの？』

雄『ああ。素晴らしい仕事だった』

小『Fクラスなんか相手してられないわ！。Aクラス戦の準備を始めめるわよ！』

Cクラスから小山さんのヒステリックな声が聞こえて来る。どうやらうまくいったようだ。

雄『作戦もうまくいったようだし、俺達もBクラス戦を始めるぞ』

明「了解」

後のことはシルフィがうまくやってくれることを願うしかないか。

Bクラス

秀「扉をうまく使うんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ。

その後、午前9時よりBクラス戦が再開され、僕らは昨日中断された位置からのスタートということになった。

雄二曰く、『敵を教室内に押し込める』とのこと。昨日雄二の護衛だったカナとスバルも参戦してる。

指示を遂行しようと戦ってるんだけど、さっきから姫路さんとティアナの様子がおかしい。

姫路さんは当然のこと。昨日シルフィに聞いたけどティアナも点はかなり高いらしい。2人とも司令官のはずなのに、何もやっていないように見える。

「「どうしたの？調子悪いなら休んでいいよ？」

ティ「大丈夫よ。やれるわ……っ！」

瑞「はい。やれます……っ！」

2人とも前に出ようとしたけど途中で足が止まる。

2人が見てる先を見ると……

明「なるほどね。そういうことか」

根本の手にあったのは手紙と写真。写真の方には小さなティアナ達  
が写っていた。

ー「ティアに姫路、命令だ。今日はもう休め」

一樹も気づいたのか。珍しくまじめな声をしている。

瑞「そんなん……私はまだやれます！」

ー「何もしないのにうるつかれると邪魔でしかないんだ。さっさと  
戻れ」

抗議をした姫路さんに、一樹は冷たい声を浴びせる。

ティ「姫路、教室に戻るわよ。一樹の言つとおりだもの」

瑞「でも……っ」

ティ「一樹、見たんでしょ？」

ー「ああ」

ティ「なら、後は任せるわ。行くわよ、姫路」

瑞「あつ……」

夏「ちよつと待った」

2人を呼びとめるカナ。なにか用事でもあるのだろうか。

夏「教室に戻ったらシルフィにDクラスに行くように伝えてくれ」

え？Dクラス？

ティ「分かったわ」

ティアナは姫路を引っ張って、教室へと戻って行った。

夏「明久。お前はバカだし、何もできないかもしれない」

余計な御世話だ。

夏「けど、絶対に曲げない、邪魔な壁を貫いてでも、まっすぐ変わらない意思があるだろ？」

……ああ、なるほどね。それでDクラスか。

明「うん。ありがとう、カナ。一樹も協力してくれるよね？」

一「始めからそのつもり。スバル、ここを頼むよ」

ス「任せて！一樹も失敗しないでね！」



—「当然！」

皆に背を向け、僕と一樹はDクラスに向かった。

あの野郎、ブチ殺す。

Dクラス

—「シルフィ、あれもう出来てるよね？」

シ「今インストール中。あきひさのもね」

—「そつか。ようやく本来の戦い方ができるよ」

—「一樹はデバイスと召喚獣をつなげるものを作ってもらったのか。一樹の戦い方は自由度が高すぎるから、味方としては本当に心強いよ。」

シ「……よし、インストール完了！じゃあ、始めるよ。準備はいいね？」

—「明「うん！」

シ「行くよ！世界史フィールド・オン！」

シルフィのパソコンから、世界史のフィールドが広がる。

—「明「試獣召喚！」  
サモン

おなじみの僕の召喚獣。観察処分者として雑用をやっていたときはただ面倒なだけだったけど、今はその肩書きに感謝してもいい気がする。

「じゃ、行くよっ！フライハイト召喚獣モード、セット・アップ！」

「OK my master, stand by ready.  
set up.」

一樹の召喚獣が光に包まれる。そして、光が消えて姿を現したときには、装備が一新され、ウインダとほとんど同じ装備になっていた。……当然胸はないけど。

明「前から思ってたんだけど、何でウインダの装備なの？ウインダールの装備なら男物なのに」

「ウインダールだと父さんと被るんだよ」

あ、そっか。

明「じゃあカムイは？」

こっちならまさに少年だけど、

「はじめはそうだったんだけどね……父さんにもティアにも兄さんにもお姉ちゃんにもメイド達にもコック達にも口をそろえて『似合わない』って言われたらね……」

すごい遠い眼をしている。これは聞いちゃいけないものを聞いちゃったかもしれない。

一「明久も、早く剣を抜きなよ」

気を晴らすように、一樹が僕に催促する。

明「そうだね。んじゃ、こっちも！」

シルフィが作った召喚獣と波道を共有できる指輪『シエアリング』を指にはめ、雨と大空の炎を籠める。

僕の剣『涙鳥』は今は木刀の状態だけど、一定の雨と大空の炎を籠めると日本刀に変化する特殊な剣だ。本当はリチュアの魔力を籠めるらしいけど、大空の炎の特徴である調和と、性質が近い雨の炎を使うことで代用できる。

木刀が2色の炎に包まれる。木刀だったはずのそれを抜くと鋭い銀色の刃が現れた。

シ「うん。両方ともカンペキだね！流石私！」

自画自賛しているシルフィはほっというて、

明「僕が壁を壊すから、一樹は根本を殺って」

一「いや、近衛部隊がいるだろうから、僕はそっちを殺るから、明久が根本を殺って」

そうか、代表が丸腰の状態にいるわけないか。

明「わかった。じゃあそれでいい」

—「うん。じゃ、お願い」

明「わかった」

壁から離れて、剣を鞘に納め、嵐の炎を籠める。

明「行くぞ！飛竜一閃！」

居合抜きとともに、嵐の炎が撃ち出される。シグナムから教わった技だけど、僕は魔法が使えないから嵐の炎でやっている。

ドオオオン！

大きな音とともに煙が舞い上がる。煙が晴れた先には、綺麗に穴があいた壁と、驚きで顔が引きつった根本がいた。

明「くたばれ、根本恭二いっ！」

僕はあつけにとられている根本に勝負を挑むために駆け寄った。

B「Bクラス近衛部隊が勝負を挑む！試獣<sup>サモン</sup>召喚！」

僕を囲むように近衛部隊が召喚する。けど、そんなのに構う必要はないっ！

—「結界を守りし巫女よ、博麗に秘めし力を解き放て！霊符『夢想封印』！」

B「それなんて東方!？」

後ろから一樹が詠唱を唱える。様々な色をした球状のエネルギーは近衛部隊を襲い、あっという間に全滅させた。

—「今だ明久!」

明「うん!吉井明久が根本恭二に勝負を挑む!」

根「ちっ……!」

世界史

Fクラス

吉井明久

74点

VS

Bクラス

根本恭二

216点

根「は、ははっ!勇んでたわりには随分と貧弱な点数じゃねえか!」  
取り繕うように笑う根本、確かに点数だけなら圧倒的に不利だ。でも、

明「技術なら負けないっ!」

再び刀身に嵐の炎を籠める。

根「え?な、なんだ!その力は!」

明「くらえっ！紫電一閃！」

強力な斬撃が根本の召喚獣を切り裂いた。

世界史

Fクラス

吉井明久

74点

VS

Bクラス

根本恭二

0点

根「なっ！？1撃だと！？」

今ここに、Bクラス戦は終結した。

でも、

根「お、おい…もう終わっただろ」

僕も一樹も止まらない。

明「人の気持ちを

—「人の思い出を

このゲス野郎を、

根「ヒツ…！来るなっ！来るんじやねえ！」

ぶん殴るために。

一・明「踏みにじってんじや、ねえエ　　っ！」

バコオッ！

根本の顔面に2つの拳が突き刺さり、思いっきりぶっ飛んだ。

## バカとガスタと卑怯者（後書き）

デバイス：フライハイト

ドイツ語で自由の意味。基本はウインダの持っている杖と同じだが、一樹の記憶から、あらゆる武器の形を再現することができる（なのはレイジングハートのような、実際に見たことある武器はもちろんのこと、Fateのセイバーのエクスカリバーなど、2次元でもOK。ただし能力を使うことはできない）

シルフィによつて召喚獣とリンクできるようになり、武装を召喚獣で使うことができるようになった。フライハイトを介して、一樹と召喚獣もリンクしているので、フィードバックがある代わりに、操作性が格段に増した。

一樹のレアスキル：次元創世パラレル・リンク

世界観のはっきりしている世界をパラレルワールドとして出現させる。ただし、自分が生まれるよりかなり前の世界は不可能（ストライク・ウィッチーズなど。ただし、現在がまたがっていれば可能）時代がわからない・はっきりしない・年度表記が特殊な世界はOK（東方など）。

あくまでパラレルワールドなので、決して交わることはないが、その世界の住人から能力を借りることができる。ざっくりまとめると、2次元の能力を使うことが出来る。

THE 厨二病能力です。でもやっぱりこういうのあってこそその2次小説だと思っんですよね。

もともとなぜスタービートだったかというのは、

「スターダストいるし、スターは付けた方がいいよな」 「ギター型の武器にしよう」



こんな安直に付けられた名前です。ガスタ要素どこ行つたし。んで、の設定を思いついて急遽デバイスを変更。ギター型から杖型へ。それに伴い名前も変更。英語だとフリーダムとかシヨボいで、ベルカ式はドイツ語だし、別によくね？とベルカ式でもないのにドイツ語になりました。

ペガソの方は、別に管理してるわけじゃなくね？となったために変更しました。

設定に書き加えておくので、忘れたらそこを見て下さい。

## ガスタとスターズと戦後小話（前書き）

はいっ！皆さんお久しぶりですっ！

タッグフォーエス6が発売されたり、武装神姫mk2が発売されたり、バイトをするために応募しまくってたりといろいろあつてめちゃくちゃ遅れました。

多分この先もこんなことが多々あると思いますが、どうかよろしく  
お願いします。

## ガスタとスターズと戦後小話

一樹 side

雄「まったく、やり過ぎだバカ野郎」

雄二の前にはゴミ……もとい、死体……ではなく、残念なことになったかと生きている根本が転がっていた。

……うん。まるでポケモンのプリンが付いているかのように、両頬がプックリ腫れている。

秀「まさか二人揃って殴るとは……壁も壊したようじゃし、退学とかにならないのかのう?」

明「……あつ! どうしよう一樹! よく考えたら僕たちとんでもないことをしてかしたんじゃないの!?!」

いまさらすぎるよ明久。

一「別に大丈夫でしょ。初犯だし、それにいまさら壁ぶち抜いたって、先生はまたお前らか。ってくらいにしか思わないんじゃないの?」

明「それはそれでどうかと思っけど」

一「何を今更」

どーせ去年いろいろやらかしてるくせに。

美「けど、召喚者に直接危害を加えるのって反則じゃなかった？」

一「戦争中ならね。でも、殴ったのは代表を倒したあと、戦争が終わった後だ。これならルール上別に問題ないでしょ？」

夏「でたよ、一樹お得意の屁理屈作戦」

一「失礼な。今回に関してはルールの抜け穴というより、適応範囲に出てからやったんだから。屁理屈でも何でもないただの正論だよ」

夏「そういうのを屁理屈ってゆーんだよ……ま、見てるこっちもスツキリしたから別にいいけど」

ス「よくはないと思うけど……」

シ「気にしない気にしない」

シルフィがテキストにまとめた(?)ところで、

雄「代表がこの様子じゃ交渉ができないな。誰か代りを立ててくれ」

B「俺でいいか？」

1人の男子が前に出る。

雄「ああ、じゃあこいつが起きたら、これを着せてAクラスに戦争の準備ができていることを伝える。宣戦布告はするなよ」

雄二がこの学校の女子制服を取り出す。さつきも思ったけど、どこから出したんだろう？

B「え、教室はどうするんだ？」

雄「交換はしない。その代りにさつき言ったことを絶対実行してくれ」

『全力で実行させよう！』

Bクラス全員が声をそろえた。

雄「よし。交渉も済んだことだし、お前ら、2日にわたる戦争ご苦労だった。今日はもう帰ってゆつくり休め」

坂本の言葉で、Fクラスが教室を出て行き自分の教室に戻って行った。

さて、これを渡しとかなきゃな。

—「ねえ、こいつが起きたらこれを渡してくれないかな？」

B「いいけど、これは？」

—「賠償金請求資料。こいつが壊させたFクラスの備品の弁償させるためのね」

B「わかった。渡しておこう」

—「よろしくね」

姫路の手紙とティアの写真も取り返したし、もうここに用はないね。  
ティアに写真を返さなくっちゃ。

……あ、最後にこれを言っとかないと。

—「そいつの制服だけど、着替えさせたら焼却処分と消毒を忘れな  
いようにね」

B「了解」

これであいつは女子制服の着心地を家まで楽しむことになるだろう。  
次の日の海鳴新聞の見出しが『女子高生の制服を着た女装変質者を  
逮捕』だったらいいな。明日が楽しみだ。

そんなことを考えながら、僕はBクラスを後にした。

廊下

ピクッ

今何か感じたような………屋上からか？

明「ん？どうしたの一樹？」

—「明久、先に教室戻ってて」

明「え？何か用事でもあるの？」

一「ちょっとね。どれくらいかかるかわからないし、先帰っていいよ」

明「分かった。じゃあね〜」

明久に手を振りながら、僕は階段を上って行った。

屋上

ガチャッ

扉を開けると、夕日にも負けない位鮮やかなオレンジの髪が目に入った。

一「よっ」

そのオレンジの髪の少女は僕の声に驚き、こちらに振り向いた。

ティ「よくここにいてわかったわね」

一「幼馴染のカンってことで。はい写真。取り返したよ」

写真を差し出すと、それを大事そうに胸に抱えた。ティアの兄さんと最後に撮った写真だ。無理もない。

ティ「ありがとう一樹。実はシルフィに頼んでずっと中継してもら

つてただけど、まさか壁を壊すとはね。他に何かなかったの？」

「僕と明久が怒られるだけなんだから、ティアは別に気にしなくていいの。それに訓練抜け出してよくなのはに怒られたからね。もう怒られ慣れちゃったよ」

最初のランニングがめっちゃキツかったんだよね。

ティ「それはどうかと思うわよ」

笑いながら冗談を言うと、ティアも笑って返してきた。

「教室に戻るうよ。シルフィ達も待ってるだろうし」

ティ「そうね。戻りましょ」

屋上のドアを開け、僕たちは校舎の中へとはいっていく。

「さて、後はAクラスだけだ。一緒に頑張ろう！」

ティ「ええ！」



## ガスタとスターズと戦後小話（後書き）

次か次の次あたりからAクラス戦が始まります。

## FクラスとAクラスと決選前(前書き)

### 問題

goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい。

姫路瑞樹・藤崎一樹・ティアナ・ランスター・シルフィ・マテリア  
の答え

good - - better - - best

bad - - worse - - worst

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

good - - gooder - - goodest

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

goodやbadの比較級と最上級は語尾に -erや -estをつ  
けるだけでは駄目です。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

bad - butter - bust

教師のコメント

悪い 乳製品 おっぱい

南夏奈の答え

good - good - good - good - good - good - good - good - good - good  
bad - bad - bad - bad - bad - bad - bad - bad - bad - bad

先生のコメント

まさか数を増やすとは思いませんでした。

## FクラスとAクラスと決選前

一樹 side

雄「まずはお前らに礼を言いたい。周りの連中に不可能と言われるにも関わらずここまで来れたのは、皆の協力があったることだ。本当に感謝している」

今日のHRは坂本のこんな言葉から始まった。

夏「まずいな、今日は傘持ってきてないぞ」

確かに坂本の性格を考えれば珍しいのかもしれないけど、そこまで言うか。

明「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

雄「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ。ここまで来た以上絶対にAクラスに勝ちたい。勝って、生き残る為には勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けるんだ!」

『おおーっ!』

『そっだーっ!』

『勉強だけじゃねーんだーっ!』

最後の勝負を前に、皆の気持ちが一つになっていく。やっぱり坂本の話術はすごいな。

雄「皆ありがとう。そして残りのAクラス戦だが、一騎打ちで勝負をつけようと考えている」

皆の士気を上げといてこの返し。皆はかなり驚いたようでざわついていた。

『どづいつことだ？』

『誰と誰が一騎打ちするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

雄「落ち着いてくれ、今からそれを説明する」

バンバン、と教卓を叩く音が教室に響きわたる。

雄「やるのは当然、俺と翔子だ」

翔子というのはおそらくAクラスの代表のことだろう。名前で呼んでるってことは結構親しいのかな？

明「バカの雄二が勝てるわけ（ヒョイ）ないじゃないか」

途中でカッターを投げられながらも、何なくさけて言い切る明久。カッター投げるとか、マジで危ないよねアレ。

雄「チツ、はずしたか。まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともによりあえば勝ち目はないかもしれない」

そこ認めるならなぜカッターを投げた。

雄「だが、それはDクラスもBクラスもそうだっただろっ？まともによりあえば勝ち目はなかった」

僕はBクラス戦の最初の状況を思いだす。

#### Bクラス戦の記憶

F「いたぞ、Bクラスだ！」

F「高橋先生を連れてくるぞ！」

F「生かして帰すなーっ！」

物騒な台詞が皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

#### 総合

Bクラス 野中長男 1943点

VS

Fクラス 近藤吉宗 764点

#### 数学

Bクラス 金田一裕子 159点

数学 VS  
Fクラス 武藤啓太 69点

物理

Bクラス 里井真由子 152点  
VS  
Fクラス 君島博 77点

どうやら生きて帰れないのは彼らの方だったようだ。……まあ、分かってはいたけど、戦力は減らすわけにはいかないか。

終わり

うん。坂本の言うとおりだね。

雄「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスの設備を手に入れる俺達の勝利は揺るがない」

夏「いや、無理だな」

カナが横から水を差す。

雄「どういうことだ？」

雄二がカナに睨みを利かせる。悪鬼羅刹と呼ばれるだけのことはある、冷たく鋭い目だ。

夏「霧島のことを名前で呼んでるってことは、結構親しい間柄って

ことだよな。そこでこの作戦を立てたってことは、霧島の苦手科目……いや、100%間違える問題を知ってるってことだ」

坂本が少し驚いたような顔をしている。普段はただのバカだけど、カナは結構策士だ。これくらい気づく。

シ「しょうこは一度覚えたことは忘れないらしいからね。昔ゆうじが間違つて教えたとか、そういうオチでしょ？年号とか」

確かに年号を間違えることは結構ある。平安京とか有名なのは問題ないけど、マイナーな奴だと記憶に残りにくいしね。

夏「もし、霧島の弱点が年号だとするなら、雄二の作戦はこうだ。

『その年号なら小学生で習う。時間制限、点数上限ありの勝負にすれば、そのころ神童と呼ばれていた俺なら余裕で満点を取れる。そしてその1問ができない翔子は満点を取れない。そうなれば俺の勝ちだ』こんなところだろ？」

雄「あ、ああ。まさにその通りだ」

カナの奴、今日はいつになくさえてるな。朝何かいいことあったのかな。

夏「でもこの策には2つ穴がある。1つは『その問題が出るとは限らない』お互いが満点をとれば、延長戦になる。そうなると問題よりも集中力の問題になってくる」

秀「確かに、習ったことすべてがテストに出るとは限らんしおう」

秀吉の言うとおりだ。全部がテストになるとすると、それはかなり



膨大な量になると思う。それこそ、この学校みたいにエンドレスでもないが無理だ。

夏「そしてもう一つ。というよりも、これがすべてだな。『雄二が神童と呼ばれていたのはあくまで昔の話であって、今ではFクラスなんかにいるただのバカ』ってことだ。それも悪鬼羅刹とか呼ばれるくらいに落ちぶれちゃった、な」

雄「何？」

今にも殴りかかりそうだな。まあバカにバカっていわれりゃ誰だつてそうなるか。

夏「雄二は過去の栄光を引きずってるだけなんだ。でなけりや今頃、Aクラスのリクライニングシートでふんぞり返ってたんじゃないか？」

雄「…っ!？」

坂本は反論できないみたいだな。すべて凶星つてわけか。

シ「完膚なきまでにやってくれたけど、一騎打ちつてところは悪くないね。集団戦じゃどんなに策を練ったって100%勝てないしね。今年は厄介なのがたくさんいるし」

美「どういこと？」

シ「まずは代表のしようこ。さっき言ったように、一度覚えたことは絶対に忘れない。だからこそAクラスのトップにいる」

一度覚えたことは忘れない、か。学生ならば一度は欲しいと思う能力だね。

シ「次はしようたと、ひでよしの姉であるゆうこ。この二人は去年、あきひさとカナの雑用の手伝いをしてたから、他に比べて技術が高い。もちろん点数もね」

木下優子と藤岡翔太<sup>しょうた</sup>。優子は僕が転校してきたときから、翔太は中学校の頃からの友達だ。

シ「4人目は工藤愛子。保体が得意で、このクラスで対抗できるのはスバルとこうただけ。それも、他の科目に変えられるとアウト」  
スバルもムツツリー二も、保体は400点を超えている。けど、それはあくまで保体であって、他の教科は明久以下。教科を変えられたら対抗策は無いに等しい。

シ「5人目は久保利光。…まあ、いろんな意味で危ない人」

あの明久が好きな人か。確かにいろんな意味で危ないな。

シ「この5人だけなら、集団戦でも勝てないこともないだろうけど、それよりもっと危険なヤツがいるんだよ」

瑞「危険な奴……ですか？」

シ「そ。点数はAクラスの中の下くらい。だけど、集中力があるし、『シエアリング』を持ってる」

もったいぶるなあ。シエアリングを持つてるってことは、波動が使

えてシルフィと親しいやつってことか。でも、僕の知ってる限り、この学校でその条件に当てはまるのは明久だけだ。去年誰が見つけたのかな？

明「え？……あつ！あいつか！」

どうやら明久はわかったみたいだ。

シ「うん。あいつだよ。くどつと同じあたりに転校してきたあいつ」

転校してきた？

—「……もしかして、あいつ？」

シ「うん。あいつ」

うわあ、嫌な奴がこの学校にきやがったな。

ティ「あいつあいつって、知ってるなら早く教えなさいよ」

ティアもしびれを切らしたみたいだ。

シ「ナルトだよ」

クラス全体がポカンとなる。

ティ「ナルト？それってマンガのキャラじゃない」

皆の言いたいことを代表してティアが言った。

— 「『波風颯』」  
なみかぜはやて

ス「はやて？それって八神部隊長の名前じゃ？それに波風って……」

— 「あつてるよ。僕たちの中学の頃の友達。はやてが二人いるからって、ついたあだ名がナルト」

ティ「波風だから、ってこと？」

— 「そういうこと」

ナルトの主人公のナルトは、苗字はうずまきだけど、その父である4代目火影の苗字が波風だから、颯のあだ名がナルトになった。そこでミナトにならないのがカナクオリティ。

シ「あいつに勝てるのはこのクラス、いや、この学校ではかきしかない」

ス「そんなに強いのか？」

— 「ヴィータに快勝。そこにシグナムを加えてよつやく5分5分つてとこだね」

ティ「私じゃ手も足も出ないわね」

最近ティアがあきらめやすくなった気がする。無理するよりかは全然いいけど。

シ「ゆうこは私、しょうたはカナ、工藤はこうたかスバル、久保は姫路、ナルトは一樹。代表は絶対参加だから、お望み通りしょうこはゆうじ。どこかであきひさ、ティアナを入れれば、7戦×15戦までなら勝てるだろうね」

これなら誰か2人が負けても、カバーできる。正直ナルトとやっても絶対勝てるって自信ないし、ありがたいね。

雄「……………絶対勝てるんだな？」

シ「80%つてとこだね。当然ながら相手もバカじゃないし」

雄「……………わかった。それで行こう」

このあと、僕たちは宣戦布告をし、まけた方が、勝った方の言うことを何でも1つ聞く。という追加ルールができたが、9対9の戦争が決まった。

雄「次で最後だ。全力で勝つぞ！」

『おお　　っ！』

## エンジンニアと姉と第1試合（前書き）

大変お待たせいたしました。

前話を投稿したときには応募だったバイトが受かって、今ではヴァイスポーターブルとかなのはGODを買うために一生懸命WORKING!!しています（ファミレスではなくコンビニで）。

秋アニメが始まって、バカテスが終わったのは残念ですが、自分のにかなり豊作なのでよかったです。

桜乃かわいいよ桜乃。

## エンジニアと姉と第1試合

高「それでは、1人目の方、どうぞ」

優「私が行くわ」

Aクラスの一人目は優子か。どんくらい強いのかな。

シ「さっそく私の番だね」

こっちからはシルフィが前に出る。

瑞「あれ？シルフィちゃんって、メガネしてましたっけ？」

—「ん？ああ、あれか」

シルフィは今銀縁のメガネをかけてる。

—「普段はコンタクトをつけてるんだよ。はずしやすいように変えてきたんじゃないの？」

瑞「普通は外す必要ないと思うんですけど？」

—「もともと眼はいいけど、付けてないと見えなくていいものが見えるんだって。戦うときには便利な能力だから、眼鏡もコンタクトも外すらしいよ」

瑞「見えなくていいもの？」

まあ、フツーの人にこんなこと言っても分かんないよね。

「そんなことより、始まるよ」

瑞「あ、はい！」

僕たちはシルフィ達に視線を移す。

優「なんだ、てっきり秀吉が出てくると思ったけど、あんなのね」

シ「顔にはやっぱりお前か、って書いてあるよ」

優「あそこってところで、Cクラスの小山さんって知ってる？」

シ「小山？ああ、Bクラスの変態の彼女か。それがどうしたの？」

優「彼女が言うにはね、私がCクラスに乗り込んで豚野郎とか言ったらしいのよ」

シ「流石ゆうこ。そこに痺れる憧れるう」

優「憧れるのは勝手だけど、私にはそんな記憶がないのよね。とな  
ると」

優子の目が秀吉をとらえる。

優「あんたのクラスにいるとある演劇部の演技って考えるのが妥当  
よね」



秀「ひつ……………」

優子のテイラノすら殺せそうな殺気を浴び、秀吉はすくみあがっている。正直言つて僕も怖い。

優「丁度、負けた方は何でも言うことを聞くっていうルールがあるんだから、そつちが負けたら秀吉を差し出さない」

シ「いいよ。でも、私が勝つたら金輪際秀吉に危害を加えないでね」

秀「頼むシルフィ！絶対勝つんじゃ！」

ここでもし、シルフィが負けたら、秀吉は明日の朝日を拝めないかもしれない。

高「教科は何にしますか？」

シ「数学で」

数学か。シルフィの得意教科の一つだ。これなら勝ってくれるだろう。

高「わかりました。それでは始めて下さい」

シ・優「試<sup>サモン</sup>獣召喚！」

2人が同時に召喚する。

数学

Fクラス      シルフィ・マテリア      508点  
VS  
Aクラス      木下優子      431点

A 『508点だと!?!』

A 『なんでFクラスにあんなのがいるんだよ!?!』

F 『いきなりハイレベルすぎんだろ!』

両クラスとも2人の点の高さに驚愕する。

優「流石ね」

シ「それほども」

優子の装備は西洋の騎士みみたいな鎧にランスと、全体を覆えるほどのでかい盾を持っている。

対するシルフィは、研究員みたいな白衣、武器は……

ス「素手?」

そう、僕の召喚獣と同じく、素手なのだ。

ティ「シルフィもデッキ使うの?」

シ「ノンノン、私の武器は、こっち!」

そう言うと、パソコンを開き、USBをセットした。

PC「武装データ、日本刀。インストール完了」

この時間わずか2秒。ノートPCでどうやったらこんなスペックになるのだろう。

シルフィの召喚獣の右手に、日本刀が形成される。PCであらかじめプログラムを作っておいて、それをインストールさせて武器を出すのか。

「今まで参加してなかったのはこれを作ってたからなのか」

シ「そゆこと。んじゃ、行くよっ！」

バツ！つと召喚獣が走りだす。

シ「はあっ！」

シルフィが素早く切りかかる。

優「甘いわよっ！」

対する優子は大きい盾で防御した。

ガキーン！と大きな音をたてて日本刀が弾かれた。

シ「おっつと」

シルフィがよろけて、大きく隙ができる。

優「隙ありっ！」

その隙を衝き、ランスを突き出す。1年の頃に明久達の手伝いして  
たらしいから、なかなか無駄がない。

シ「甘いのはそっち！」

よろけた体をそのまま倒し、槍をかわす。そのままバク転の感覚で  
顎を蹴り上げる。

優「うそ!?!」

### 数学

Fクラス

シルフィ・マテリア

508点

VS

Aクラス

木下優子

347点

ス「すごい、100点近く削った！」

ティ「あの点数になると、蹴りであんなに減るのね」

優「まだまだっ！」

体制を立て直した優子は、次々とランスを突き出す。それも、あんなに重い装備をしてるのに、とても早く。

シ「よっ、ほっ」

「ただシルフィはそれを難なくかわす。」

「優「くっ、やっぱり当たらないわね」

シ「これくらいなら、集中すれば何とかなるんだなそれが」

美「すっ……」

瑞「なんであんな速さでかわせるんでしょうか……？」

—「あんなの、掠りもせずにかわせるのはあいつだけだよ」

「それも最小限の動きでやっているの、ますます無理だ。」

優「なら、これでどうよ！『爆破』！」

突然ランスの持ち手の方が爆発して、その勢いでランスが加速しシルフィをかすめた。

シ「……っ！」

シルフィから余裕の表情が消え、痛みに顔をしかめた。シエアリングにもフィードバックがあるのか。

秀「シルフィ！」

シ「大丈夫。これくらい！」

数学

Fクラス	シルフィ・マテリア	409点
	VS	
Aクラス	木下優子	411点

優「今の」

シ「ん？」

優「あんたが確実にかわせないところを突いたはずなんだけど、なんで掠った程度で済んでんのよ？」

別に魔導師でも波動使いでもないただの人間のはずなのに、この幼馴染は恐ろしいことをさらっとおっしゃる。

シ「私の腕輪の力だよ」

優「そうか、アンタも400点越えだものね」

シ「私の腕輪能力は『追従』。自分とおなじ動きを、自分の召喚獣にさせる能力だよ」

へえ〜。まだいくつも見た訳じゃないけど、こういう能力のものもあるのか。

シ「それに私自身の能力、『メジャーアイ視覚換算』を加えてかわしたってわけ。まあ、かわしきれなくて掠っちゃったけど」

ス「メジャーアイ？」

—「シルフィのレアスキルだよ。目で見ただ物の質量・重さ・距離・速度とかを、目で見ただけで数字として瞬時に判断できるんだ。それを応用することで、攻撃の予測ルートを計算して、確実に攻撃の当たらない場所に動ける。その逆も然りで、避けづらいところに攻撃することもできる」

テイ「だけど、オン・オフが利かないから、普段はメガネとかコンタクトをしてるのよ」

ス「そうなんだ」

—「そうなんだよ」

明「ずいぶん呑気だね2人とも」

—「まあ100%勝てる試合なんて応援してもおもしろくないからな」

明「まあそうだけどさあ」

優「一樹、明久、後でアンタ達に用があるわ。これが終わったら屋上にきなさい」

—「そんなこと言うてる前に、目の前の敵に集中しろよ」

優「まったく、バカにすんなっつーのっ！」

今度は横になぎ払う。シルフィはそれを跳んでかわす。

シ「いくら早くても、私には通用しないよ!」

そのまま切りかかるが、またしても盾に阻まれる。

シ「むー、やっぱり刀じゃ無理か」

そう言うと、大きく跳んで優子から離れる。

優「逃がすかつ!」

爆破を使って加速し、シルフィに襲いかかる。

シ「ほっ!……ってあっつ!」

マトリックスみたいに体を反らせかわすも、爆破の熱風が熱かったらしい。

### 数学

Fクラス      シルフィ・マテリア      372点

VS

Aクラス      木下優子      394点

やっぱり優子も無傷じゃ済まないみたいだな。あんな大層な鎧着ても、爆破のダメージは0じゃないのか。

優「ちょこまかと!」

またランスを爆発させ、強引に方向転換を行う。



シ「そこまでする!?!」

優「黙りなさい!」

シ「くっ……………!」

シルフィは自分の体を走り高跳びのように反らし、その場で跳ねた。正直シュールすぎる。

それと同時に、シルフィの召喚獣も同じように体を反らし、その下を、ゴウ!と風を切る音を立てながらランスが通り抜けていく。

シ「あっつ……………!」

#### 数学

Fクラス      シルフィ・マテリア      335点

VS

Aクラス      木下優子      328点

優「どうしたのよ!防戦一方じゃない!」

シ「自分の点をどんどん使ってくれるからね。攻撃するより楽じゃ  
ん」

目に見ても分かるような挑発。

優「安い挑発には乗らないわよ」

当然優子はそれに乗らない。ずいぶんと精神面も成長したもんだよ。

シ「それは残念。ところでさ、その鎧ってすごくない？」

優「何よ急に」

シ「だってさあ、ゼロ距離爆破してるのにゆうこにはあんまりダメージがないでしょ？だからすごいなああって思って」

優「いくら褒めても手加減なんてしないわよ」

シ「そういうことを言いたいんじゃないさ」

優「じゃあ何よ？」

シ「…………その内側で爆破したらどうなるかなって思って」

シルフィがいたずらっ子みたいな顔をしながら、召喚獣の白衣の裏からスイッチみたいなものを出した。

そして、優子の召喚獣の鎧の隙間から、かすかに緑の光が漏れている。

優「なっ、いつの間に!？」

シ「いつだろーね？最初からか、それともさっきか。ゆうこはどっちだと思っつ？」

ポチッ

ドカーン！

すごい音をたてて、優子の召喚獣が爆発した。

数学

Fクラス

シルフィ・マテリア

335点

VS

Aクラス

木下優子

0点

高「勝者、Fクラス」

Fクラスから、歓声が湧き上がった。

## エンジンニアと姉と第1試合（後書き）

続きはいつになるかはわかりませんが、11月中にはupできるよ  
うに頑張ります！

気長に待っていて下さい。

### 能力説明

メジャーアイ  
視覚換算：シルフィノレアスキル

視界に入るすべてのものを数値として判断できる能力。長時間継続して使うともものすごく疲れるので注意が必要。

追従：シルフィノ腕輪

召喚獣に自分とおなじ動きをさせる。跳んでかわしたときとかも無理やり動かせる。ただし、召喚者は何もないとこで体を捻ったり、跳んだり屈んだりしているので、ものすごくシユール。

爆破：優子ノ腕輪

ランスや鎧を爆発させる。爆破に必要な点数はない代わりに、反動がある。無理な方向転換はたまに体のパーツがもげるので注意が必要。

## エンジニアとFクラスとマル秘データ(前書き)

とあるFクラスのエンジニアが記録しているマル秘データファイル  
Fクラスver.です。

設定と同じく話が進むにつれて更新していく予定です。

## エンジニアとFクラスとマル秘データ

藤崎一樹：Fクラス

空戦魔導師／ガスタ

### 学力データ

得意：日本史・世界史・古典・家庭科

苦手：保体・科学

総合点：約2000点

### 召喚獣データ

・武器：デッキ

・腕輪：????

・特殊：デバイスリンク

召喚獣とデバイスをリンクさせる。フィードバックあり。

### デッキデータ

・使用デッキ：ガスタ

・エース：スターダスト・ドラゴン& amp;・ダイガスタ・スフィ

### アード

### 魔法データ

・ランク：SSS+

・デバイス：フライハイト（インテリジェント）

・武器形状：杖（基本形態）

見たことがある武器に変化できる。

・魔法術式：風霊魔法（ガスタ）

・レアスキル：次元創世<sup>パラレルリンク</sup>

2次元の技を使える。発動キーは「リンク」本人がわかれば詠

唱などでもOK。強い能 力ほど魔力消費が高い。

#### 波動データ

- ・リンク：測定不能（少なすぎるため）
- ・属性：大空（使用不可）

#### 5D・Sデータ

スターダスト・ドラゴン

- ・スキル：絆<sup>コネクト</sup>

仲間の魔法・波動をコピーできる。発動キーはそのまま「コネクト」

#### 備考

- ・ガスタの未裔。
- ・5D・S所有者
- ・公式測定の上限がSSS+のため、そこに納まっているが、それを軽く超えるほどの質と量を持つ。
- ・魔導師としてはオーバースペック。波動使いとしては一般人以下。
- ・リンクとコネクトを合わせることで、2次も3次も対応可能
- ・同じ幼馴染なのに、ティアナと私で扱いの差が激しい。
- ・ティアナにもはや夫婦の域を超えるくらいの信頼を置いている。
- ・完全無自覚カップル。さっさとくっつけこのヤロ ！

シルフィ：マテリア：Fクラス

波動使い／エンジニア

#### 学力データ

- ・得意：数学・科学・物理・技術
- ・苦手：得意教科と英語以外

総合点：約2000点

#### 召喚獣データ

- ・武器：USB武器プログラム
- ・腕輪：追従

召喚獣に自分とおなじ動きをさせる。

- ・特殊：シエアリング

召喚獣と自分の波動をリンクさせる。フィードバックあり。

#### デッキデータ

- ・使用デッキ：TG
- ・エース：TG - ブレード・ガンナー & TG - ハルバード・キャノン

#### 魔法データ

- ・ランク：
- ・レアスキル：視覚換算<sup>メジャーアイ</sup>

視界に映るものを数字として判断できる。魔力じゃなくて体力を使う変わったスキル。

#### 波動データ

- ・ランク：AAA+
- ・武器：自作ボックス
- ・属性：霧・雲・嵐

ティアナ・ランスター：Fクラス

陸戦魔導師 & p：波動使い / 狙撃手

#### 学力データ



- ・得意：英語・世界史
  - ・苦手：国語・古典・日本史
- 総合点：約2000点

#### 召喚獣データ

- ・武器：二丁拳銃
- ・腕輪：????
- ・特殊：デバイスリンク

#### デツキデータ

- ・使用デツキ：ドラグニティ
- ・エース：ドラグニティアームズ・レヴァティン&amp;トライデント・ドラキオン

#### 魔法データ

- ・ランク：AA
- ・デバイス：クロスミラージュ（インテリジェント）
- ・武器形状：二丁拳銃
- ・魔法術式：ミッドチルダ式

#### 波動データ

- ・ランク：AA
- ・属性：嵐

#### 備考

- ・幻覚魔法が使える。
- ・魔導師としても波動使いとしても優秀なレベル。
- ・同じ幼馴染なのに、一樹と私で扱いの差が激しい。
- ・一樹にもはや夫婦の域を超えるくらいの信頼を置いている。
- ・完全無自覚カップル。さっさとくっつけこのヤロ！

スバル・ナカジマ：Fクラス  
陸戦魔導師／戦闘機人

#### 学力データ

- ・得意：保健
- ・苦手：保健以外
- ・総合点：約600点

#### 召喚獣データ

- ・武器：メタルグローブ
- ・腕輪：????
- ・特殊：デバイスリンク

#### デッキデータ

無し

#### 魔法データ

- ・ランク：AA
- ・デバイス：リボルバーナックル&amp;マッハキャリバー（ブリスト&amp;amp;インテリジェント）
- ・武器形状：ナックル&amp;ローラーブーツ
- ・魔法術式：近代ベルカ式
- ・IS：震動破砕

四肢の末端部から目標の物体に振動波を送り、共振現象を発生させる事によって対象を粉砕する。

#### 波動データ

無し

吉井明久：Fクラス  
波動使いノバカ

#### 学力データ

- ・得意：家庭科
- ・苦手：家庭科以外
- ・総合点：約400点

#### デッキデータ

- ・使用デッキ：ジャンクエクシーズ
- ・エース：ジャンク・ウォリアー& amp; No.39 希望皇ホープ

#### 召喚獣データ

- ・武器：木刀
- ・腕輪：????
- ・特殊：シエアリング& amp; 観察処分者

#### 魔法データ

無し

#### 波動データ

- ・ランク：SS+
- ・武器：涙鳥（日本刀）
- ・属性：雨・嵐・雷・大空

#### 備考

- ・シグナムと張り合える強さ。

- ・魔力を使う技を波動ではほぼ完璧に再現できる器用さを持つ。
- ・シエアリングと観察処分者の両方にフィードバックがあるので、攻撃を食らうと一番被害が大きい。

南夏奈：Fクラス

波動使いノバカ

学力データ

得意：

苦手：全部

総合点：約450点

デッキデータ

- ・使用デッキ：E・HERO
- ・エース：E・HEROアブソルutzero

召喚獣データ

- ・武器：レザীগロブ
- ・腕輪：????
- ・特殊：観察処分者

魔法データ

無し

波動データ

ランク：D

属性：晴

備考

・波動は傷を回復させる時しか使わない。

姫路瑞樹：Fクラス

一般人/天才

学力データ

- ・得意：家庭科以外
- ・苦手：家庭科（本人は得意だと思っている）
- ・総合点：約4500点

デッキデータ

- ・使用デッキ：天使
- ・Eース：The splendid VENUS

召喚獣データ

- ・武器：大剣
- ・腕輪：熱線

魔法データ

無し

波動データ

無し

備考

・家庭科も得意と思っているので、テストで上手く点が取れないこととに納得がいかないらしい。

土屋康太：Fクラス  
一般人ノムツツリ

学力データ

- ・得意：保健
- ・苦手：保健以外
- ・総合点：約550点

デツキデータ

- ・使用デツキ：忍者
- ・エース：No.12 クリムゾン・シャドー & amp; 機甲忍者  
ブレード・ハート

召喚獣データ

- ・武器：短剣
- ・腕輪：加速

召喚獣が目にも止まらぬ速さで動かせる。ただし操作が限りなく難しくなる。

魔法データ

無し

波動データ

無し

備考

- ・学園内でムツツリ商会を営業中。

木下秀吉

一般人/男の娘

学力データ

- ・得意：日本史・古典・家庭科・美術
- ・苦手：数学・化学・物理・技術
- ・最高点：約900点

デツキデータ

- ・使用デツキ：真六武衆
- ・エース：真六武衆・シエン& amp・真六武衆・キザン

召喚獣データ

- ・武器：薙刀
- ・腕輪：?????

魔法データ

無し

波動データ

無し

備考

- ・世界を大きく超えて、異世界でも認められた男の娘。
- ・得意教科が多い代わりに苦手教科も多いので、戦争では安定感がない。

島田美波：Fクラス

一般人/貧乳

学力データ

- ・得意：数学
- ・苦手：古典
- ・総合点：約700点

デッキデータ

- ・使用デッキ：マシンナーズ
- ・エース：マシンナーズ・フォートレス

召喚獣データ

- ・武器：レイピア
- ・腕輪：?????

魔法データ

無し

波動データ

無し

備考

- ・本人曰く、日本語が読めれば他の教科ももっと取れるらしい。

坂本雄二：Fクラス代表

一般人/悪鬼羅刹

学力データ

- ・得意：家庭科
- ・苦手：美術
- ・総合点：約1000点



デッキデータ

- ・使用デッキ：暗黒界
  - ・エース：暗黒界の龍神
- グラフア

召喚獣データ

- ・武器：メリケンサック
- ・腕輪：?????

魔法データ

無し

波動データ

無し

備考

- ・元神童。今はただのバカ。
- ・馬に轆かれて死ぬ。

## エンジニアとAクラスとマル秘データ(前書き)

とあるFクラスのエンジニアが記録しているマル秘データファイル  
Aクラスver.です。

設定と同じく話が進むにつれて更新していく予定です。

## エンジニアとAクラスとマル秘データ

木下優子：Aクラス  
一般人／腐女子

デツキデータ

無し

学力データ

- ・得意：数学・英語
- ・苦手：家庭科・技術
- ・総合点：約3500点

召喚獣データ

- ・武器：ランス&amp;盾
  - ・腕輪：爆破
- ランスと鎧の一部を爆破させる。反動あり。

魔法データ

無し

波動データ

無し

備考

・勉強は天才レベルなのに、腐女子である残念な娘。頭がいい人はどこか1つ残念なところがある気がする。

工藤愛子：Aクラス  
一般人／フレッシユエロ

学力データ

・得意：保健

・苦手：

・総合点：約3000点

デッキデータ

・使用デッキ：エレキ

・エース：エレキマイラ

召喚獣データ

・武器：斧

・腕輪：帯電

斧に電気を帯電させる。飛ばすことも可能。

魔法データ

無し

波動データ

無し

久保利光：Aクラス

一般人／腐男子

学力データ

・得意：国語・英語・古典

・苦手：美術

デッキデータ

- ・使用デッキ：植物（主に薔薇）
- ・エース：スプレンドィッド・ローズ&amp;・凜天使クイーン・オブ・ローズ

召喚獣データ

- ・武器：鎖鎌
- ・腕輪：?????

魔法データ

無し

波動データ

無し

備考

- ・美術センスが前衛的すぎて誰もついていけないらしい。
- ・アーツ

霧島翔子：Aクラス代表

一般人/ヤンデレ(?)

学力データ

- ・得意：全教科
- ・苦手：
- ・総合点：約4800点

デッキデータ

- ・使用デッキ：氷結界
- ・エース：氷結界の龍トリシューラ & a m p ・氷結界の龍ブリューナク

#### 召喚獣データ

- ・武器：日本刀
- ・腕輪：????

#### 魔法データ

無し

#### 波動データ

無し

#### 備考

- ・小学校の頃からゆうじ一筋らしい。
- ・1度覚えたことは絶対忘れない脳を持っている。

#### 波風颯：Aクラス

陸戦魔導師 & a m p ・波動使いノインヴェルズ

#### 学力データ

- ・得意：家庭科・美術・技術以外
- ・苦手：家庭科・美術・技術
- ・総合点：約4700点

#### デッキデータ

- ・使用デッキ：悪魔 & a m p ・ドラゴン
- ・エース：レッド・デーモンズ・ドラゴン

## 召喚獣データ

- ・武器：バスターソード
- ・腕輪：????
- ・特殊：シエアリング

## 魔法データ

- ・ランク：SS+
- ・デバイス：デモンズクロウ（レッド・デーモンズ・ドラゴン）
- ・武器形状：バスターソード
- ・魔法術式：邪霊魔法（インヴェルズ）

## 波動データ

- ・ランク：S
- ・属性：嵐・雷

## 5D・Sデータ

レッド・デーモンズ・ドラゴン

- ・スキル：ガイドブレイカー 防御玉砕

魔法や波動による防御を破壊することができる。

## 備考

- ・魔術使い型の忍一族の末裔らしい。
- ・一樹のライバル。仲はいい。
- ・あだ名はナルト。カナ命名。

## スターズと鼻血と第2試合（前書き）

保健体育

以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞樹の答え

初潮

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

明日

教師のコメント

随分と急な話ですね。

藤崎一樹の答え

死

教師のコメント

それだとこの世に第二次性徴期を迎えた人間はいないことになりま  
す。



土屋康太の答え

初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。(以下長いので略)

教師のコメント

詳しくすぎです。

## スターズと鼻血と第2試合

高「では、次の方どうぞ」

ム「……………（スック）」

次はムツツリーニか。科目選択権があるから、安心して保険だけで戦える。

？「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスから出てきたのは緑色の髪をしたショートカットでボーイツシユな女の子。

シ「やっぱり工藤愛子が出てきたね、今んとこ計画通りに進んでる」

人任せみたいだけど、僕は100%勝てるって保証がないから、皆が勝ってくれるとメンタル的に非常に助かる。

愛「1年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね」

やめるんだ工藤。その屈託のない笑顔のせいで、クラスの奴らがかなり気持ち悪くなってる。

高「教科は何にしますか？」

ム「……………保健体育」

ムツツリーニの最強にして唯一の武器が選択される。

愛「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

随分と余裕そうだな。ムツツリーニの実力を甘く見てるのかな？つっても、僕もよく知らないけど。

愛「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？………キミとは違って、実技で、ね」

ブシャアア！！

バタツ

ー「うわっ！？クラスの奴らが突然鼻水を噴水のように噴き出してぶっ倒れた！？」

明「ムツツリーニイ　　！！！」

なになに？どういこと！？

愛「君は…藤崎君だっけ？保健体育苦手そうな顔してるし、教えてあげようか？もちろん、実技で」

保健体育が苦手そうな顔ってなんだ。まあ実際そうだけど。

ー「運動は嫌いだからいい」

愛「そういう意味で言ったんじゃないんだけど……」

ス「ー樹ってやっぱり、そういう知識無関心？」

シ「うん……ティアナもそうなんだけど、だから2人で平気で風呂に入ったり、着替え中の部屋に堂々と入ったり、平然とやってのけるんだよね」

ス「あー、やっぱり。そういえば六課でもしてたなあ」

シ「やっぱり……あの二人にとってはそれが普通なんだよね。小さいころからそうだったから。離れてる間に治ったと思ったんだけどなあ……」

ス「あれってそういうことなんだ」

シルフィが大きく息を吐いている。2人でボソボソと何の話をしてるんだろ？

高「Fクラスの選手が召喚できそうにありませんので、誰か別の人を出して下さい」

高橋先生、少しは周りを見ることを覚えようぜ……

ス「じゃあ、私が行く！」

スバルが勢いよく立ちあがる。

雄「ああ、そうしてくれ」

ティ「負けんじゃないわよ」

ス「わかってるって！」

スバルが前に出ていく。

愛「へえ、女の子だ」

ス「私はスバル・ナカジマ。今年転校してきたんだ！よろしくねっ  
！」

今度はAクラスの男子が気持ち悪いことになってる。Fクラスは依然としてぶっ倒れたまま。

高「それでは、始めて下さい」

愛・ス「試獣召喚<sup>サモン</sup>！」

F「なんだ、あの巨大な斧は！？」

F「しかも、なんかビリビリしてるぞ！」

F「なに！？それはぜひ食らってみたい！」

こいつら……そのまま死んじゃえばよかったのに。

### 保健体育

Fクラス      スバル・ナカジマ      394点

VS

Aクラス      工藤愛子      446点

スバルの奴、ギリギリで腕輪を逃しちゃったか。まあスバルなら腕輪がなくても大丈夫だろう。

ス「すごいね。その武器」

愛「でしょー そっちは打撃系かあ、普通に見たら私の勝ちだね」

ス「そんなの、やってみなきゃ分かんないよ。それに、私の武器はこれじゃないし」

愛「え？どういうこと？」

ス「こういうこと！マツハキャリバーピースト召喚獣モード、セット・アッブ！」

「OK my master, stand by ready.  
set up.」

スバルのペンダントが光を放ち、召喚獣を包む。出てきたときにはいつものバリアジャケットにマツハキャリバー & amp; リボルバー ナックルになっていた。

愛「え……どういうこと？」

ス「フッフッフー、これぞシルフィが生み出した武器！その名も「デバイスリンク」！」

両手を腰に当て、いかにもなどや顔をしてる。

テイ「なんであんたが誇らしげなのよ」

ス「え〜いいじゃん。デバイスは私のなんだし」

ー「そのデバイスもシャーリーが作ったものだけどね」

ス「使ってるのは私だもん！」

テイ「はいはい、ほら、早く始めなさい。相手も先生も困ってるわよ」

ス「む〜、分かったよ」

愛「えーと……初めていいかな？」

ス「うん！どつからでもきなさい！」

愛「なら、いくよっ！」

ダツと工藤が走りだす。あんなでかい斧持ってるのに、その動きはメチャクチャ早い。

愛「とうー！」

ブオン！とものすごい音を出し、振られた斧は、

ス「なんのー！」

スツと一歩ずれることでかわされ、地面に突き刺さった。実際に刺さってるわけではなく、システムがそう見せてるだけなんだと思うと「かがくの ちからって すげー！」って言いたくなる。

ス「はあっ！」

そのままスバルが殴りかかる。

バコオ！

愛「くっ！」

工藤は召喚獣の操作に慣れていない。それに転校してきたらしいから1年のころにやってたらしい実践練習もやってないってことだ。そんな彼女にスバルの攻撃が避けられるわけもなく、綺麗に決まった。

#### 保健体育

Fクラス      スバル・ナカジマ      394点

VS

Aクラス      工藤愛子      267点

愛「（近距離は危険かあ）……なら、これでどう!？」

スバルの近くにいるわけでもないのに、工藤はその場で斧を振り回した。

ス「何してるかわからないけど、そんなの無駄だよ！」

ガチャン！



「Load cartridge」

スリボルバーシユート！」

スバルの周りにできた球状の魔力体が工藤をめがけて打ち出される。いくつか斧に弾かれるが、それでも工藤の点数を削りきるだけの量は残ってる。

工藤の周りに煙が立ち、

(しとめた！)

スバルだけじゃない。僕だっと思ったし、ティアや明久も、てかクラス全員思ったかもしれない。

けど、

バシユウウ！

轟音と共に煙の中から発生した砲撃が、スバルの召喚獣を貫いていた。

### 保健体育

Fクラス スバル・ナカジマ 0点

VS

Aクラス 工藤愛子 237点

ス「にやあああああ！？胸に穴があいたような痛みがああああ  
！！」

そして、フィードバックによって悶えていた。

愛「おしかったね。私の腕輪「帯電」はね、斧に電気をまとわせるだけじゃなくて、それを飛ばすことができるんだ。しかも斧を振り回すことで、電圧を上げることができるんだ。たまった電気は防御にも使えるし、そのまま打ち出せばさっきみたいな砲撃にもなるんだ。どう？すごいでしょ！」

うん。これは確かに

一「超電磁砲レールガンみたいだな」  
明「超電磁砲レールガンみたいだね」  
テイ「超電磁砲レールガンみたいね」  
シ「完全に超電磁砲レールガンだね」  
夏「100%超電磁砲レールガンじゃん」

愛「食いつくところなんだ……」

工藤のツツコミは喧騒に包まれた教室に吸い込まれて、よく聞こえなかった。

## スターズと鼻血と第2試合（後書き）

ティアナは一樹と一緒にになってアニメ見たりしてるので、実は結構詳しくったりします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1516v/>

---

バカとガスタとstrickers

2011年11月24日01時54分発行